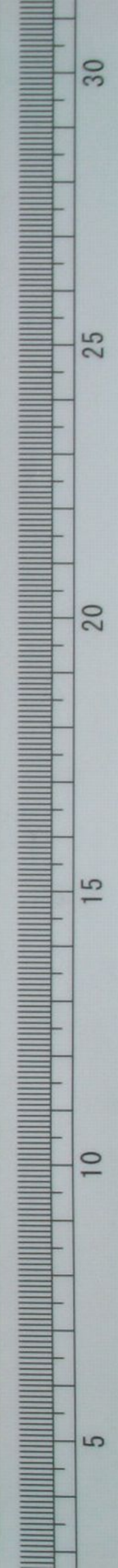


我樂多誌

昭和十年一月起筆

特別
14
1919
464



新羅山人筆 藻魚之圖



小室翠雲氏藏

38-9250

176723

我楽多誌

昭和十年一月記業

○家老、秋月古香の書幅あり古香歿後、浴
び、一時予の家、暫く之を押置きの一とす。
先考在世中、新年に首に此幅を床に掲げ
て例として、其時と云く

萬古一頁是妙念瞬、大道照乾坤

所簡くとも、我が國体も道破す、余例、倭
之、古床、掲げ且、新年の試、竟、此の語を
最幅、知人の囁、應す

○元旦、甚、遠の物、親、親、も、た、の、祝、電、到、り、



報電賀年

タイナン 二六

ウシゴ メクヒガ シ五ケンテウ

イチシマケンキチ

キンガ シンネン、エスミ



牛込 760

省信遞



通代有本年創始のことろんは持こころぬぬめおと
 ○新年の残葉下の数枚の額面を心つれが文館に
 行を遊んたす、途表駐馬の四字を考して以
 とり自ら一笑を感した。こゝろ七十六歳の自分の考く
 べき語かハきこうら。花と春とあり馬を駐のころい
 三三十年七前の下れと氣あかつき春城酔人と飲
 駢を録し、酔客の思ひ出としたり。
 ○亡友和田篤吉の法名を遊んた因縁が未亡人
 から自合の七遊んかと頼さん此の新年の陰意
 公同時に任牌と刻するから、支那の法名を尋
 へて揮毫をせしむれんれ、匆卒遊んたの
 貞松院淑春の英大姉

であつた。未亡人の儀名の英いあつたのむさぶりを入
れたのである。新年因し位牌をい書くは忘やの氣が
しつ三日に及びヤツト書を把えんとし位牌を歸せ
と星味を塗つてあつた。朱墨をむけんはさうぬとこ
に朱墨を採して見ても、日下生朱墨を用ひよひ
自合いといは仕舞はぬ、どうさかしてもふさふさのむ
じささく銀座を朱墨を自から愛ひ出さすや
ツト書いぬが、然りいことかあつたか、こんど友を
すし一片の情誼だ、跡をを、就ち死から香を贈
ふ氣持に朱墨を贈ふに。
○舊曆除夜の夜に放送局から新年三日の夜の放
送を頼まぬに断つたが、強くとよめから流して、此夜は

其を果した。よむに放送をやさうのこんど四回目であ
る。今年前夜の歯を悉く失つて、入歯せしむいん
放送とすことか可なり大膽である。保し自分の
存在をいさす一方便かと思ふに、此の放送の細曲
版後にも及ぶささくある、偶然ささく郷田の年
中行すといふ左義長を悉く取つた。幸又一
分七刺ささくいんとする所を悉く陳べ畢つた。
○良寛の和歌自伝をいさくよむ意はあつた。他人の歌
いさく七言集全解をいさくもき歌すのむ、よめが良寛
自伝をいさく傳ひり、各書くさうのいさくよめが良寛の
研究家が他人の地をいさくことを、搦りしよめ良寛を
評家といさくをいさく一例といさくよめ良寛の句をいさく

焚くといひ風かて来りたてふ
の句をらすいひくくさいてゐる。又

まは雨夏文主に秋日なり廿の中より
とまの和歌七指の言意の押直りあるがこゝの變厚
九年刊行の石田米伴の鞠隨筆又出てある
与原より人の従向の前者よりうつてゐる
ハ實曆八年の事とあるが、与実の心は
ふと待たざる、与原の詞者も前の和歌をかきたた
句を記してある。

おすれめや二ろ十りの録いし
右を書きかへてあつて言意の通
ゆき格活が利をすのたつこゝ



社 響 振替東京四六五〇五番



定珍老

與板への書状は十日の目づけに
致し候間、十日より天気次第に人
つかはされ可被下候。大ふるしき
一枚もたせて、荷物少々のかしお
き候間、萬葉國上へ被遣の節つか
はし可被下候。並に朱唐紙朱墨、
筆お忘れくださるまじく候。もし
萬葉略解を御覽じ被遊候はば、二
三冊あつて残り可被遊候。御取し
まひ被成候て、早速もたせ可被遣
候。萬葉二、三、四、五、所持仕
候。 良 寛

此間寒氣信にたへがたく候。然

卷七のあはれことなる
とて合つんやうな

萬葉集十の卷より二十の卷まで
御拜借たまはり度候。一の卷より
十の卷までは、何卒御借をき可被
下候。是は又の爲

嚴寒の節如何御暮被遊候
曾照事にて出候。まじく

之法帖二卷御返申候。下巻御借被
下度候。過し頃はたはしたまはり
實に珍らしく候。十八日うちに忘
御禮申上候。頓首

十二月廿八日
尚みそ少々御換可被下候 良 寛

定珍老

寒氣も少々ゆるみ候。如何御暮
し遊ばし候や、僧も久敷風邪にて

〇人見藤一氏より 菊花を粉にほぐせ
る様先に初冬の空は澄み渡りけり

臥り、御消息も不參候。何卒古事
記御恩借度候たまはり。右草々

しはす廿一日

良 寛

古事記を二十日はかり御拜

下され。昔火のすけまき

なまごいかなはみこしんば
さかたの源の御書、
「クベキ」と「田の日」
居れば、御書御書御書の
「田の日」。「田の日」
居れば、御書御書御書の
「田の日」。「田の日」
居れば、御書御書御書の

反郷音

良寛和尚雜記(一)

遠山 萬里

良寛和尚が知友から借りて讀んだ書目中、手紙などによつて明らかに判るものは左の數種である。

○ 先日書狀あげ候へ共、此度好便有之候間又申上候。石地のないところより三音考御借被下候や、若し御宅まで参候はば今日被遺被下候。以上

十一月十日 良寛

○ あさもよしきみが給へしさゆりねを植えてさへ見しいやなつかしみ

三音考は李平世話にて信に石地より参り候。
十二月廿五日 良寛

○ 由之老
(前の手紙は宛名が明らかでなかつたが、この手紙によつて弟由之に宛てたものであることが判る。)

焚く石の風かきて来る。夜は、
の句を言ふ。いふ。いふ。いふ。又
とま。雨夏。又。主に。秋。日。と。廿。の。中。と。ふ。ん。我。も。な。せ。と。
九年。刊行。の。言。田。米。伴。の。勅。院。筆。又。出。て。あ。る。人。
皆。原。より。人。の。御。向。の。前。者。こ。ろ。つ。て。あ。り。て。言。言。ん。ハ。出。生。
ハ。寶。曆。八。年。と。あ。る。か。ら。良。寛。の。心。を。よ。う。い。ふ。こ。と。の。十。
ふ。と。待。た。さ。い。方。原。の。詞。者。こ。の。前。の。和。歌。を。か。さ。た。の。あ。ら。
句。を。引。き。あ。る。
あ。す。れ。め。や。二。百。十。の。録。ひ。し。し。音。原。
○ 右。を。書。き。つ。く。あ。る。あ。ら。く。良。寛。の。心。を。よ。う。い。ふ。と。ぬ。め。れ。反。
御。考。於。活。が。利。を。一。に。か。ら。こ。し。ぬ。め。て。あ。る。

反郷音社
振替東京四六五〇五番

印刷發行人 加藤信正

○ 萬葉集十の卷より二十の卷まで御拜借たまはり度候。一の卷より十の卷までは、何卒御借をき可被下候。是は又の爲

こよろぎのいそのたよりにわがひさにほりし
たまだれのをすのこがめをあひえてしかも

霜月三日 良寛

橋左門老

(橋左門は由之の子で、良寛には甥にあたる者である。良寛和尚が國上山五合庵在住當時讀んでゐた萬葉集は主として與板町大阪屋及び渡部村阿部定珍に借りたものであつた事は、文書によつて明らかであるが、この手紙によつて見ると由之、左門からも借りて讀んだこととなる。しかしこれはずつと後のことである。恐らくは木村家寄附時代の事であらう。尚舊橋屋藏書中にあつた萬葉集二十卷の寫本(左門寫)には良寛和尚筆と思はれる異見が書き添えられてあるやうである。)

○ 寒さ彌益に候得共御堅勝に御凌被遊候哉、野僧無事に日を送候。

○ 先日萬葉集奉存候。今日御返濟仕候何卒次を拜借度被下候。新瀉へ参り候のも取集て御借可被下候。いまだ不参候はば其中又人を指上可申候。そのおりに御借可被下候。十一月末までには大方返濟可仕候。

九月廿九日 良寛

三輪權平老

(三輪氏は三島郡與板町の富豪で代々大阪屋と稱した。權平はその當時の主人である。三輪氏と良寛和尚との關係に於て特に注目すべきことは、和尚の

讀んだ萬葉集略解がこの大阪屋竹藏のものであつた一事である。)

○ 嚴寒の節如何御暮被遊候や、野僧無事に被遊候。然ば萬葉略解三の上下十四の下御落手被下候。猶又一二の卷御拜借奉希候、是は地藏堂中村、寺泊外山兩家之中に遺而も相とどき可申候。以上

十月二十四日 良寛
三輪權平老

○ 寒さの節如何御くらし被遊候や野僧無事に打過候。今日人あげ候間萬葉のこり一、二、三、十四の下御借度被下奉希候。

十一月十三日 良寛
權平老

謹賀新年 加藤朝鳥

○ 御書面拜見仕候。御風邪の由如何候や。御歌猶寛々拜見可仕候。

○ 御書面拜見仕候。御風邪の由如何候や。御歌猶寛々拜見可仕候。ゆり、酒、なつとう恭受納仕候。萬葉集十六卷御返申候。近き便に初十卷御借可被下候。にはかに便有之候間何事もいそぎ申候。以上

正月七日 良寛

元旦

○ あすは春と云夜
なにとなく心さやぎていねられずあしたは春のはじめとおもへば
(この手紙は佐々木信綱氏の珍藏にかり宛名不明のものであるが、文面か

○ 此度は御疎遠に打過候。然れば與板より萬葉略解参り候や、此者にあつらへつかはさる可く候。もし未だ参らず候はば、御所持の萬葉拜借可被下候。下讀いたしおきたく候。與板へも早速人遣はし可被下候。以上

神な月十六日 良寛
定珍老

○ 右件の書物大阪屋へ返候。残りたるは五六冊に候。残りたるは五六冊に候。寒氣にならぬ中書しまひ何卒御世話ながら萬葉集取寄せ可被下候。以上

十月二十九日 良寛
定珍老

○ 先日は御返翰恭拜見仕候。如仰寺泊外山へ人遣候處、書物は未だ

○ 原の白膠木あけおちつきて露霜に下生の草は枯れをめにけり柳林のなかに白膠木はいろづきてあらし霧のうごくまにみみみ霜いたき田の畔道に午ちかきぬく陽はさせと蟬とはす霧ふかきあした原田にむなしくも一人稻刈るかぢかみにつつ枯れがれの稻田の畦にうごく風あかき白膠木の葉をちらしつ霧ふかくしづむ朝田に人居りて晚稻刈るらし鎌入るゝ音刈りをへし田の畦の草をうごかして今日の日ぐれの風は吹きさつぐみの群あさ啼きする山すでに下葉黄ばむ落葉松林

晚秋山居吟

齋藤 楳

九・十一・十五記

焚く石の風が来て来たのうらやま

の句を言ふは、いさゝかきいてゐる。又

去るハ雨夏又主に秋日なり廿の中よりあんな我も恨せむ
と云ふ和歌七指し言ふ竟の押書はあつたか、こゝハ慶曆
九年刊行の三田米伴の勅陪筆と出てゐる。何れ
皆原より人の従向の前者よりつてゐて、言竟ハ出生
ハ慶曆八年七月廿七日、言竟の心で言ふことハ
ふと待たさへ、言原ハ向古ハ前の和歌をかきたるの
句を言ふは、いさゝかきいてゐる。

わすれぬや二る十の鉢いさし 言原
の右を書きつゝ、あつた言竟の心で言ふことハ、
向古ハ前の和歌をかきたるの句を言ふは、いさゝか
きいてゐる。



東京市世田谷區玉川瀬田町一〇一八
反響社
振替東京四六五〇五番

印刷發行人 加藤信正

反響

寛和尙雜記(一) 遠山 萬里

萬葉集十の卷より二十の卷まで
御拜借たまはり度候。一の卷より
十の卷までは、何卒御借をき可被
下候。是は又の爲

こよるぎのいそのたよりにわ
がひさにほりし
たまだれのをすのこがめをあ
ひえてしかも
霜月三日 良寛

橋左門老 良寛

(橋左門は由之の子で、良寛には甥に
あたる者である。良寛和尙が園上山五
合庵在住當時讀んでゐた萬葉集は主と
して與板町大阪屋及び渡部村阿部定珍
に借りたものであつた事は、文書によ
つて明らかであるが、この手紙によつ
て見ると由之、左門からも借りて讀ん
だこととなる。しかしこれはずつと後
のことと恐らくは木村家寄附時代の事
であらう。尙舊橋屋藏書中にあつた萬
葉集二十卷の寫本(左門寫)には良寛
和尙筆と思はれる異見が書き添えられ
てあるやうである。)

嚴寒の節如何御暮被遊候や、野
僧無事に被過候。然ば萬葉略解三
の上下十四の下御落手被下候。猶
又一二の卷御拜借奉希候。是は地
藏堂中村、寺泊外山兩家之中に遺
而も相とどき可申候。以上
十月二十四日 良寛
三輪權平老

寒さの節如何御くらし被遊候や
野僧無事に打過候。今日人あげ候
間萬葉のこり一、二、三、十四の
下御借度被下奉希候。 敬具
十一月十三日 良寛
權平老

謹賀新年 加藤朝鳥

寒さ彌益に候得共御堅勝に御凌
被遊候哉、野僧無事に日を送候。
先日は萬葉集奉存候。今日御返濟
仕候何卒次を拜借度被下候。新瀉
へ参り候のも取集て御借可被下
候。いまだ不參候はば其中又人を
指上可申候。そのおりに御借可被
下候。十一月末までには大方返濟
可仕候。 敬具
九月廿九日 良寛
三輪權平老

(三輪氏は三島郡與板町の富豪で代々
大阪屋と稱した。權平はその當時の主
人である。三輪氏と良寛和尙との關係
に於て特に注目すべきことは、和尙の

御書面拜見仕候。御風邪の由如
何候や。御歌猶寛々拜見可仕候。
ゆり、酒、なつとう恭受納仕候。
萬葉集十六卷御返申候。近き便に
初十卷御借可被下候。にはかに便
有之候間何事もいそぎ申殘候。以
上。
正月七日 良寛
元旦
あすは春と云夜
なにとなく心さやぎていねら
れずあしたは春のはじめとお
もへば
(この手紙は佐々木信綱氏の珍藏にか
かり宛名不明のものであるが、文面か

ら推して考へるとどうも定珍あてのも
のであるらしい。阿部定珍は最も和尙
に忠實な心友であり、西浦原郡渡部村
の里正をつとめてゐた。)

此度は御疎遠に打過候。然れば
與板より萬葉略解参り候や、此者
にあつらへつかはさる可候。も
し未だ参らず候はば、御所持の萬
葉拜借可被下候。下讀いたしおき
たく候。與板へも早速人遣はし可
被下候。以上。
神な月十六日 良寛
定珍老

(文中「與板より」とあるは與板町大阪
屋三輪氏よりの意である。和尙はこの
三輪氏から千蔭の萬葉略解を借讀し、
更に阿部定珍から借りた仙覺本萬葉集
に略解の注釋を書き入れてやつた。
その事は今日なほその朱書した仙覺本
二十卷が阿部家の家寶として保存され
てあることによつて明らかである。)

先日は御返翰恭拜見仕候。如仰
寺泊外山へ人遣候處、書物は未だ
はり度候。
十一月十二日 良寛

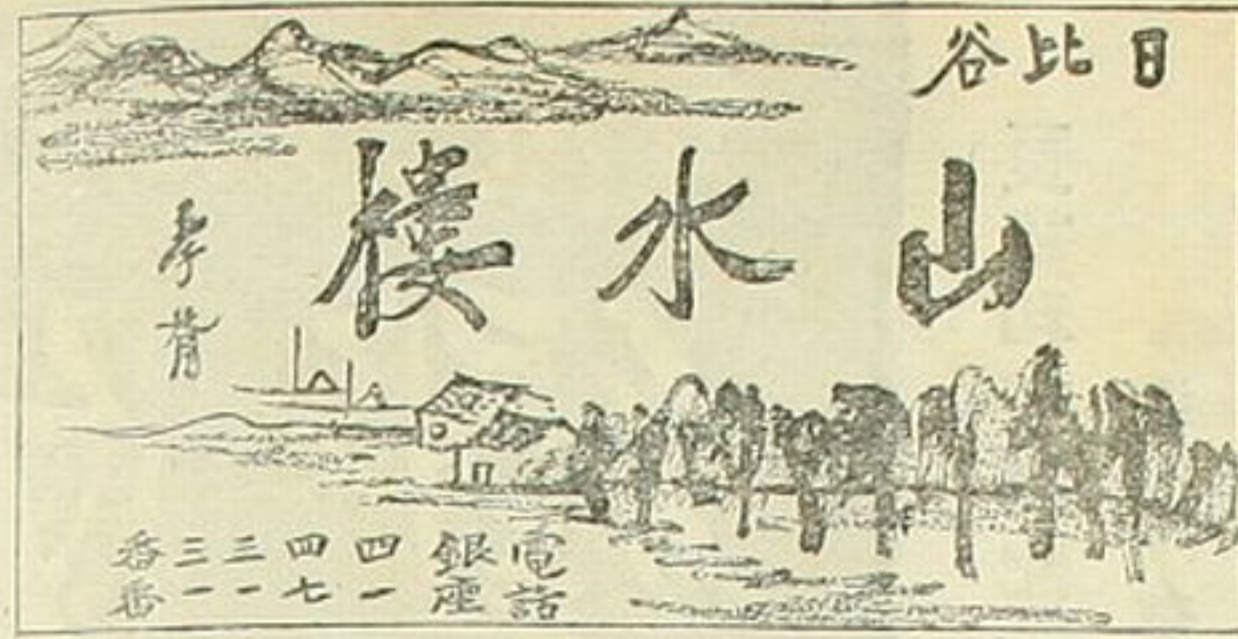
不參候と申越候。依て其由おし
せ申進候。何卒御正し被遊御拜借
く奉希候。
十月二十二日 良寛
定珍老

萬葉書き申候間、大阪屋へ御返
し可被下候。此次の卷を借度候。
之は此中の狀に委細申越候。何卒
明日にも人遣度被下候。朱墨も殘
少になり候間、一丁たまはる可く
げたの緒も、並に筆一本。草々か
しこ。
十月二十九日 良寛
定珍老

右件の書物大阪屋へ返濟度被下
候。残りたるは五六冊に候。餘り
寒氣にならぬ中書しまひ度候間、
何卒御世話ながら萬葉集を早く御
取寄せ可被下候。以上。
とくりもたせ上候。是に油たま

晩秋山居吟 齋藤梓

原の白膠木あけおちつきて露霜に下生の草は枯れそめにけり
柳林のなかに白膠木はいろづきてあらかき霧のうごくまにみゆ
霜いたき田の畔道に午ちかきぬく陽はさせど蟬はとばす
霧ふかきあした原田にむなくも一人稻刈るかぢかみにつつ
枯れがれの稲田の畦にうごく風あかき白膠木の葉をちらしつゝ
霧ふかくしむ朝田に人居りて晩稻刈るらし録入るゝ音
刈りをへし田の畦の草をうごかして今日の日ぐれの風は吹きたつ
つぐみの群あさ啼きすぐる山すでに下葉黄ばむ落葉松林
九・十一・十五記



れば趙州録一卷御家に有之候はば
遣度被下候。以上
十月二十九日 良寛
定珍老

○ 定珍老
先日は久々にて御面談仕大悦奉
存候。然ば道風の石ズリを貴宅に
失念仕甚不安心に候。御むつかし
ながら御尋被下此者にもたせ可被
下候。
ウハガミは丸いコガタ（ここに
道風帖の表紙の繪ありしも略す）
初めに
散々難……
もし主人の御るすにてしれす候
はば是をふちやうに御尋可被下
候。以上
正月十三日 良寛

○ 解良氏用事
（此の一通によつて見ても、和尙が道
風の書を學んでゐたことがわかる。「散
々難……」とあるは「散散美難帖」であ
ることは云ふまでもない。解良氏は越
後西蒲原郡國上村大字收ヶ花の豪族で
良寛と親交のあつた家である。）



○ 中村權衛門老
（中村權右衛門は西蒲原郡地藏堂町の
人で、良寛和尙にとりては父方の親族
でもあつた。産物の世話などを何かと
は締ぬき可被下候。給にいたし度
候故。
十月二十六日 良寛

○ 菊池寛が芥川賞
及び直木賞と云ふ
やうなことを考へ
出した。また山本
有三が明治大學文
學科に文學振作の
資金として數千圓
の寄附行爲をしたりした。いづれも相
當に時代を見抜く眼がなくは出來な
い話で、到底所謂官立の大學教授連の
眞似の出來ないことであるだけは確言
が出来るし、何んとしてもお偉いこと
だと云はざるを得ない。▲芥川賞、直
木賞と二つに分けたのは例の大衆派藝
術派と二つに分類しやうとする傳統を

○ 義之法帖。六、古事記。七、散々
難美帖。八、太白集。九、杜子美
全集。十、懷素自敘帖。
○ （註は全部、相馬御風先生著「良寛和
尙尺牘」及大島花東先生著「良寛全集」
に依り附した。）

ひいたものだらうが。これは頗る扼介
な事だ。まことに島國特有の變挺な惡
癖から出たことで、既に美術の方でも
一科二科と此の分類が厄病の痼疾に
なつてしまつて居るのに、文壇の方
で又候やるとは……と眉をしかめ
るものが多い。▲その分類はもし文
學理論の上から云ふならば、物語派と
小説派と云ふことにしたら何うだ。兼
常清佐の説によると住吉物語と云ふ本
を區別にして、文章の止めが、それ以
前は現在、以後は過去の動詞が用ゐて
あるとのことだが、之れなんかは中々
の發見で、現在止めは小説體であり、
過去止めは物語式で、住吉物語以後は

○ 自分此年未だ何事も成さず、
かまひしんぬいといふに、
任色し、自分此年未だ何事も成さず、
年迄む十六年と云ふ、
定めんとを、
とて賞共金を、
二十日と云ふ、
二千円とし、
日少くハ、
二千円と、
益七、

焚く石の風が来て来る
の向を言ふ、
まハ雨夏文、
我も

自らの自らの社名として全社の統括をなす所の
 事としてあるは、若し自らが口勤の社名であるならば、
 自らの二倍三倍の額にほゞなるにmmかす、100%

市島社長就任ヨリ辨任迄ノ報國納徳額

(但し期未償与金ヲ念フズ)

自大正七年十二月	年報	2,000.00	$\times \frac{5}{12}$	=	1,166.66
自〃〃十三年七月	〃	2,500.00	$\times 3$	=	7,500.00
自〃〃十三年七月	〃	3,500.00	$\times 1 \frac{5}{12}$	=	4,950.00
自〃〃三年十一月	〃	4,000.00	$\times 6 \frac{1}{12}$	=	24,334.00
自〃〃三年十二月	〃				
總計					49,950.00

市島社長

市島社長は折角神人であるから、この自らの統括
 統計表をぬめを公に材料の元をいふこと。

〇津路編の著人深の市島が想を居か自筆をなして
 眼をのいた、是は白内症と眼科醫が現症
 につれたこと、往年大治と遷るの大合のめつた
 ありき者か津路したのがいふ誰かしあつてある
 が、霞のいぬ河の朝顔目がおぼけ流ら左もつる
 ありき者か、志は、いかにさうしたの、いかにあ
 ることそのことをいふ、いかに市島がの、いかに
 ぬい山崎順とさし、道音博士が、眼とさし、折角
 朝六日記の古い板概を書いた後、此の眼病を
 診断して病名をヒステリヤ、世里内障と

めけてあるが、里白一巻であるのの興味を惹く

○お馬御殿の隨筆「一人巻」のゆゑ、お馬御殿から
つゞいて話の筋をいれとあるが、稿本雅邦の左利
きであつたことある、自今も今も初甲山が雅邦の筆
かたきと進みさきさきゆゑ、危んで右の手を巻
つたこと、

○早稲田の圖書館本「偽者書」とあるが、速水
行道が稿本を、自今自今から其全部を購置する
べし、其の二巻ある何人かを知り得るうらむ
る圖書館館長、自今自今偽者一巻の行を考へられ
其由、速水を知りぬと記し、此の行、大坂市北
東の圖書館、早稲田と知らぬ未だの人、速水の

早稲田

傳を、知るせとくんは、まゝ、たゞ、あつた

速水行道の「美濃」四郡上藩、山侯の家
前名、三、四、五、名、皇侯正、山、侯、家、系
集、玉、昆、の、著、作、者、維、新、時、日、清、江、戸
詰、家、子、息、朝、日、太、夫、氏、光、の、平、方、清、和、
隊、と、房、と、脱、走、し、信、州、今、津、方、面、の、新、教、し
り

山梨の附記「三」の「あつた」と、就て、昭和五年三月
改訂新編上郡八幡所大田成和氏「速水行道
」の「一巻」とあると、其行跡を、而して、
其の内流者、改訂「刊」の「維新史」解題、
記「一」二三四頁と、於て、此書の解説を試み

しとあり、山梨氏の先代「雁新純史」をいふもあつた
人なり

○高木西平七昭和十年二月三日、眼病ありてついに終つた
まをいへば、折一は、この年、誠意の成上つた日、年長
誠意の故をいふも、演壇に登り、祝辭を述べた。彼を
いふの意をいふに、元來、この人が名残りをあつた。彼は七
十九歳で、自分も、四才の長女が、此人が、衆議院の
年長者であること、少くも、この人が、あの人より年
の老いよりも、衆議院に、轉じたから、其の元と、思つた。高木
七平、壯年時代からの交り、政治上の同志でもあつた。
目的、衆議院に、列したこともあつた。堂の、（高木）高木が、誠
意、衆議院に、列したこともあつた。終始、一貫、熱心の、堂員、は、是



高木西平七昭和十年二月三日、眼病ありてついに終つた
まをいへば、折一は、この年、誠意の成上つた日、年長
誠意の故をいふも、演壇に登り、祝辭を述べた。彼を
いふの意をいふに、元來、この人が名残りをあつた。彼は七
十九歳で、自分も、四才の長女が、此人が、衆議院の
年長者であること、少くも、この人が、あの人より年
の老いよりも、衆議院に、轉じたから、其の元と、思つた。高木
七平、壯年時代からの交り、政治上の同志でもあつた。
目的、衆議院に、列したこともあつた。堂の、（高木）高木が、誠
意、衆議院に、列したこともあつた。終始、一貫、熱心の、堂員、は、是

るい。
○理子博士小井久平から扁額の押毫を漏さん比り
忘れたる比が、昨年思ひ出し「奪天」の三ひきを
書しを責を果し。此人の紙は古事出身の化書
致で、其術研究の爲め、肉眼を堂に強人と其の
隙をみる。早大の教授であつた。吾州体合の合
がある。奪天の三ひきは減多し、許さるべき程
ひき。自合の印刷、今此関係の職工坊主人
の比る、常々此傳を書いておつたことかあるが他
に許さるべきに此の博士である。
○昨年時を異し、上野、二本の歯牙のぬい
りと失つて、差を、その不便が、堅いよが一切

念心、名交み、津鹿をわくく、人の生、次や
あやう、うつ、あ、あけぬ、氣心、新、年、放、送、を、試
み、あ、う、し、て、か、も、海、風、が、随、分、と、後、人、の、え、る、と、一、茶
か、傳、へ、一、本、あ、う、と、あ、い、山、道、を、失、つ、た、比、記、さ、
か、あ、う、の、て、覚、へ、さ、一、笑、し、ん

一茶の四十八回、其の睡の徳華に一茶の左のぬい、記し
十のりの書、言、こ、ろ、切、差、の、中、寒、う、を、け、ん、の、友、わ
らのやうに、昨、を、お、り、を、さ、く、入、ん、だ、る、に、中、に、あ、ら
り、と、あ、つ、た、ぬ、け、す、昨、の、先、僅、爪、の、か、し、る、程、を、い
す、も、き、や、う、さ、く、味、強、く、な、る、歯、を、し、か、と、啜、て
引、な、け、る、に、昨、の、ぬ、け、す、し、と、遠、の、ぬ、り、の、
く、比、け、ぬ、あ、い、ん、あ、か、佛、と、頼、み、な、る、ぬ、れ、一

本の遺多しけり。たこしよきあやさう。志いさし
釘ぬく。よこそせば。まほしとぬけんきよめを
遺のぬけをあたひ頼ちあむ。あむ。あむ。アモア
こが佛あむ。あむ。佛
なつら。やの龍のき。碇さきりくす
カリくと竹ちりけり。きりくす
んを。後んが。我遺多し。の。放逐が。有る。日。若く。つれ
を。思ひぬ。祥。の。い。ぬ。赤。カリくと。井。を。か。が。り。流。を。か
き。や。あ。さ。き。り。く。ま。ま。ま。の。う。及。ひ。ぬ。こ。と。を。恥。ぢ。且
つ。美。や。ら。の。物。に。は。く。も。ぬ。
大隈侯の晩年の雄弁の今も義遺のおうげが
あつた。また時侯の指印もまたた時侯の入崖



を脱してをを侍婢に洗らせ居る。是れ。是れ。美
遺の無いの。自分も相手を。洗せん。は。フ。ニ。ヤ
く。こ。一。向。け。き。取。ん。ず。今。ぬ。命。に。大。い。権。威
の無いことを感。名。さ。け。り。感。ん。ん。こ。と。か。あ。る。
自分も前遺全部を矢のれ時。侯のぬく。い。あ。る
う。れ。と。試。み。行。を。見。し。も。又。さ。と。ナ。マ。ナ。カ。一。本。二。本
の。残。遺。が。あ。る。こ。と。古。流。し。す。且。つ。つ。ニ。ヤ。く。の。晩
年。の。遺。も。も。ろ。く。満。人。の。い。辰。も。も。年。の。美。の。故
こ。あ。ら。う。か
食物を遺る。善。善。の。善。も。い。味。外。と。さ。ん。て。あ。る
か。確。な。味。の。一。部。を。形。化。つ。て。あ。る。遺。の。全。比。の
人。の。美。を。感。し。ま。い。か。も。あ。ら。う。か。遺。を。い。つ。て

年刊行の多くの酒書と異なり、而して斯書の如くあるもの、
於て中と一段するものありと見ず、是書に自序の酒談
而首はわりぬか、其由五六を編録す

秋の雨さびしく降ると夕晴のせすん、
花はうん月はうん、
かみしけん、
柑の酒とくく出の音さけん、
酒の飛、
をみ、
灯と、
神の湯のふ、



酒をこわん、
雪の夜、
○亀田勝、
銀虎香、
酒を、
○其前、
左の句、

其の前、
○其前、
いや、
を、
侍、

界隈とある大和出身の礎の早大の校友がある
此の自公が此男の大関とあるを生きと居るの一寸
疑問である。

業を擱くは臨人の自公の酒を交つた人の豪傑のものと
近接して見るとさういふ少くもさういふ才(自公の血統も純
つこの方面をたぐつて又その自公の先考が豪傑の
叔母の嫁に真時の主しが豪傑も自公の家も自公
豪傑のあり、公家の親我依お父子が豪傑の
つれ等一々早大の豪傑の。自公の初少の頃何と
法印詩人徳源寺に早大の豪傑も竹橋も酒豪
があらぬ。自公の上京して早大の豪傑の中は山川他次
郎佐夫惣斬とある。酒豪の豪傑も自公の御
軍に在りてある。時と交つた酒豪も岩崎家
の自代とて早大の豪傑の豪傑も自公の
未だ千賀法匠後、吾内省の侍醫とある。概

村員一と此のしと坂のまき井南義二と河定が
 (此大由母之)お説先で交つに勢成の中川源生(大田
 孫次右エ門)同しく村上方面に交つに依成、百武の
 田村右方面に御家恒納を以て居るの酒多し
 つに、東条で交つに中川源生(大田)村幸田(西村)
 寺跡(寺堂)岡倉(寛文)お田(美次)中川(幸田)長田(秋清)
 早大の交りも此に、和坂(湯三)長田(秋清)
 鈴木(宗吉)早大(秋山)塩原(山道)老田(東佐)田(虎)
 稲次(山田)長(徳)寺(公)中川(源生)西村(捨)
 中川(武吉)新(誠)江木(翼)中川(源生)西村(捨)
 三(三)が(お)れ。交りも原(清)が(お)れが、深く油(七)交つに人(三)
 就(七)の(三)しく(速)流(力)ある(が)ま(三)り(三)の(者)暇(す)る。



○此(三)の(め)り(習)癖(が)あ(り)て、餅(に)丸(を)煮(て)洗(つ)て(か)ら(る)は(此)の
 口(に)口(に)飯(を)餅(に)餅(と)煮(す)や(う)る(こ)と(あ)る(と)就(終(る))
 是(を)捨(つ)て洗(つ)て(う)る(餅)を(煮)つ(て)と、(ま)の(考)り(ま)長(壽)を
 保(つ)て(け)せ(る)も(あ)る(ま)の(餅)を(煮)つ(て)流(流)ハ(鳥)類(を)珍(し)く

○自分(が)試(み)る(に)三(三)の(夜)の(夜)送(り)冬(地)の(如)人(の)年(を)入(つ)て
 方(を)か(ら)ま(き)び(未)に、中(川)の(未)知(の)人(か)ら、^蘭扇(を)玉(に)就(て)
 七(つ)と(委)しく(教)へ(て)く(ん)と(う)て(未)知(の)も(自)分(が)自(分)
 の(特)に(誦)ぐ(る)こ(と)も(あ)る(の)を、多(く)も(知)ら(ぬ)但(れ)に(蘭)毛(と)
 合(は)せて(下)け(つ)る(う)る(就)て(少)年(時)代(の)記(憶)を(述)つ(て)列
 挙(す)る(こ)と(お)よ(そ)を(左)の(如)き(こ)と(あ)る(が)あ(る)

大幡帖 的(大書りと書く) 稲穂

▲ナリアヒ木 正月の儀式の中で普通幽玉木と言はれるあれを私共の方ではナリアヒ木といひます。稻穂や煎餅小判の外餅花でいろく商賣に因んだもの穀物、果實等を表徴した形のものを作つて下げます。そして農家では業事一年の農耕行事に像つて、吊すのは中曆正月の十日四ですがそれをサツキ（田植の事）と言ひ、取るのはその十九日で刈上げと號し必ず縛り繩を鎌で切ります。臺木は山にあるミヅキの枝を用ゐますがナリアヒ木とは各種のものを生らせるから「生り合ひ」木だろつと思ひます。兎に角中曆の正月新曆の二月ではこゝらは毎年四五尺以上の積雪を見て居りますのに、儀式を儀式として早くも戸外の仕事に執着してゐるのは格別の情景ではありませんか。（津川町竹村鐵之助氏等報）

節 法 志 ち

の迷札の如く金屋の心はリヤ
あときま

（口） ガラク（玩具入）

雅ッサイツチ

りり莫解さむて出来

勢の洋七ある

○森脇美樹の回窓に村居大中と云ふ人あり異道者
 仇をさすも 追冥と云ふか其例罪さす未だの人は
 女人も 句集が百人回と題す 昨後後（さ
 千の句を拵ゆす

自叙の余

雲の雲か 坂子降すも 刺さへすに
 裏表さく 追ひたれさかひけり
 徳貞寺のすぢやあめり月
 丙の月風のせんか 動きけり
 本死寺 雪格れ沈み 京都こも
 棠木さすも けねるしう 雪あまも
 里根の師も 似顔宿す 庭さるも
 剃刀の手をえ煮し 今朝の冬
 柔白く 小徑描き 裾ゆき
 寒の影か ちづ 湯玉の破れ 一音
 おひん房も 出れ 顔月さく けんけり

手洗鉢の氷も躍る不夜の家
一茶忘のまどぬに燈灸りけり
昔清坊の扇根を大空おききけり
生きけりぬ凍結の首動きけり
紙屑と師走の所を吹かぬけり
山を振る力失せぬる晝寝いふ
舌の先山葵の焼けぬ初鱈
乍候の長しし蟻の窓寂いふ
舟舟ししかぬ一紙魚や古玉の命
此の舌刻々変る晝寝いふ
大風を耐ゆる病もあふまぬと悼芳ぬ
杉原牡丹咲き盛りの日あるさうふ

清風や岐平提灯の吊りどころ
民の血をいばり色ぬ牡丹も
夢又こをばぬきし雪の影も
まふぬ山を柳が折れぬと佳の予
三月や不夜に魚けり杉木
火の種を育む日刺を冬うけり
吟雪長禁酒の是処と更けぬけり
烟者の心瓜香も冬に借りけり
かくくもや腹もや互を佳能い
まの飯や湯殿の桐の豆ランブ
ふを隔る吟うふお鐘の暮暮いふ

○二月十日故来文の巻にクニキの及故と過る、二三手、
八の巻内の記、沈十年落合武次(芳武)任有、度賢
古筆、仲狩、是川、等の金、銀、元、書、あり、皆
極、物、向、流、る、外、二、淡、岩、公、國、に、催、し、了、日、本、ハ、ラ
マ、飲、の、田、形、圖、を、し、得、了、西、洋、紙、摺、る、の、沈、廿七
年、九、月、十、五、朝、鮮、王、信、の、沈、沈、を、寄、り、了、り、
こ、筆、寄、の、經、申、せ、る、山、正、右、中、の、千、と、成、り、經、申
の、將、校、ハ、皆、其、似、顔、を、寄、り、了、り、と、云、ふ、由、是、の、故、白
る、も、冬、け、ち、の、記、多、を、載、り、了、り、此、國、ハ、得、る、こ、と
古、し、難、し、此、の、圖、と、合、は、せ、る、ハ、ラ、マ、マ、飲、の、宣、傳、書、の、一
枚、あり、是、の、沈、廿三年、米、國、の、南、北、旅、館、の、ハ
ラ、マ、を、畫、し、了、り、了、り、佛、心、の、画、伯、テ、ア、ト、が、三、年

沈十年

の日子を費し、了、り、了、り、云、ふ、悲、し、い、こ、と、日、本、に、ハ、ラ
マ、を、催、し、了、り、了、り、此、の、三、條、者、の、ま、ま、の、沈、の、圖
あり、中、に、石、殿、の、沈、年、圖、あり、ラ、ン、ト、將、校、ハ、
中、エ、ツ、リ、ス、アル、グ、マ、教、小、所、と、云、ふ、廿七年、王、信、の、沈
沈、を、ハ、ラ、マ、と、し、了、り、了、り、此、の、圖、と、見、る、也、
○木、也、昔、お、の、沈、年、と、云、ふ、本、國、に、就、し、山、崎、と、云、ふ、
お、の、の、大、抵、の、政、堂、を、忘、れ、了、り、の、所、業、と、云、ふ、こ、と、
か、有、困、の、宣、傳、書、に、件、あり、木、也、の、沈、也、
と、云、ふ、こ、と、あり、梅、津、村、の、沈、の、事、也、の、沈、し、木、也、
ハ、陸、中、側、の、通、中、ハ、沈、沈、を、日、本、の、領、土、と、し、此、の、沈、
あり、及、し、日、本、の、西、京、の、沈、沈、を、獨、立、國、と、し、是、を、
接、助、す、べ、し、日、本、の、領、土、と、す、る、の、沈、ハ、日、韓、合、邦、の

次第に見ても、うらやまの意を、
此の巻と巻上に及んべい、
ハ之のそとて、情概し、
木重も略々、
と、
乱境に、
ハ、
此の死、
と、
木重の死、
リ、

源氏物語

を、
一の、
と、
と、
を、
○山陽、
あり、

天賦、
混沈、

眼目、

○トル、
人、
其、
格、

くくくく

可成り世々其の長江に未期合無て打
・意やま備はるゝ家候も左所へ改悔の意
考らぬに和歌書くし引物に由れり後四と誠
●一帯の海を流し、その形便の道に改む自
由にあり、よ木竹等一紙の消息を(る)るは
「其故若他事もあはくし、得るは候
て、そのこと、そのこと、そのこと、そのこと、
程し、流るる思は、書し、所生も、飲茶の香
清浄、空しく、西に、以来、一書を、こもる、
も、情、も、あ、り、所、を、こ、も、る、

右の四月六日附七合九手紙に一端に未年と



記してある、年祭の形式は、○奉書二つあり、
木野老道四の下に花押がある。

北の二つは、及故ともなる、大きな帳面を得たこと
八作重家の御奥へ魚類の俵数を申先、九書が
志考へ、魚類流甚の不定直は、中の中、
端。

寛延二年、伊達政宗御奥の旨とある

西二月九日、(鮎)と始り、魚類十七品を列挙
し、此今不時直は、鮎、鮎の御者不
二割増、鮎、

御奥御役人、庶中政宗大目付土井又三郎、
田中石見守、政宗御代、

此こと川柳をえくしてゐる。読み書きの教へつれうじや
ふ。川柳をえくしてゐる。

○日本に雪月花を愛する風流人と云ふもの、保し口時れ雪
月花を敵視するものがある。その矛盾のやうな事があるが、その
理由がある。何故と云ふに、雪月花は花街に於て愛し、紋日
口は年中行事として、其の核令と豪華華を教へ慣習が
ある。娼婦が愛する向うを無心をさすもの、此時もある。客は客、此
核を少しも撥弁を喰ひ、正直な客の体面を維持せね
ばならぬと無理難題をしめて、死んが火中に入ら、江戸時代
に愛する息子をその家庭に、如何に雪月花を忌んん
と、さあ極く笑ひ、ガア雪が降つた、と張腹の目息子の
行動を見渡つてゐる。彼等の貴重の監視を破つて此

昔句(世界)
世印(世界)
月(花)

方へ走つて、家庭がハヤしくと雪や月や花を、怒んがめ、息
子の身を持ち崩させ、その風流心が、敷産を湯におさせ
る。此の風流心を、多くの場合此の風流が因となる。勲高
さで流産地能く放逐さす、川柳が此間の消息を
め、多く又め、巧み、侍くも、長か、風流(派手)と云
ふに、全く此る、こけ拍、ある、川柳を原志を、後んが
所感と程さ。

○此夜の雪、紙に石川博士の書、死を傳へ、我邦
の動物界の権威を失つた。この情、あつた、博士
と自分、同窓同甲、ある、あつた、長い交り、あつた、
哀傷の感、強に、深い。博士、言ふ、と、
さ、蓬、柳、を入、赤毛、を、究、から、唐、も、ろ、こ、の、も

かあり

一月十八日記

○二月十八日、利かきあゆみ、神宮後主をたのむ、白く今も
 従後漢子と居んば、あゆみの床の間に、鶴の幅を掲げしあ
 つれば、荒沖の池に、雀の幅がある、あゆみの床に、この幅を
 つて、先代が、不逞子、存に、贈つた、いふ、ある、あゆみ、大
 火の家、然か、一ま、ころ、うれ、む、子、存、から、贈る、ん、れ、と
 の、場、因、流、一、と、ゆ、え、な、い、つ、七、北、席、の、白、合、の、法、敵、三、村
 竹、清、の、種、々の、コレ、ク、レ、オ、シ、の、法、か、出、れ、が、昔、清、か、永、年、
 種、々の、若、を、集、め、て、あ、る、こ、と、と、初、め、を、や、へ、れ、ど、ん、な
 中、の、う、い、い、ま、あ、る、と、し、い、え、る、と、い、ひ、法、大、帝、の、御、札
 の、若、か、あ、る、と、い、ふ、れ、が、動、七、す、と、人、の、傳、り、え、ん、て、寄、り、
 二、撮、る、ん、と、い、ふ、ま、あ、る、と、い、ふ、れ、丁、部、テ、ー、グ、ル、に、葉、子、か、出、て

長り、銘、と、い、ふ、く、ろ、七、の、若、か、一、本、活、つ、と、あ、る、も、白、合、
 の、思、ひ、の、ま、い、三、村、の、種、々、か、自、分、の、種、々、茶、人、の、名、を、知、
 所、若、を、白、合、と、け、つ、と、聴、く、と、あ、る、茶、人、か、果、々、と、
 室、の、北、若、を、紙、入、り、入、れ、し、持、ゆ、く、と、室、の、或、る、茶、人、
 の、紙、合、も、し、後、々、読、む、と、い、ふ、ん、こ、ん、じ、け、か、あ、る、の、か、若、
 の、肌、に、其、の、身、某、日、某、日、某、の、茶、合、と、あ、る、と、い、ふ、と、傳、
 へ、ま、い、ま、い、と、い、ふ、が、若、の、名、に、其、茶、味、は、此、種、の、茶、
 若、か、あ、る、と、い、ふ、伊、大、夫、の、説、を、元、次、い、て、通、を、利、し、
 か、三、村、の、茶、に、味、か、る、の、い、ふ、も、ん、ま、い、氣、が、つ、い、て、あ、る、
 とい、ふ、あ、ゆ、の、白、合、と、い、ふ、と、大、谷、流、の、川、徒、の、自、然、佛、壇、の、法、か、出、
 れ、あ、ゆ、の、ま、い、に、茶、火、と、佛、壇、を、焼、い、た、の、か、京、都、の、味、ハ
 人、と、い、ふ、と、二、若、の、出、来、の、物、の、あ、つ、た、い、ふ、と、い、ふ、と、

馬の... 三馬... 三馬攻勢

○式亭三馬と馬琴に互ひる中が... 三馬攻勢

左目... 所の書... 河古義物

引き用ゐるといふも、目撃するに...

その他... 書目と載する... 世に...

どりの... 自ら大方の天を...

と有り、一身の米榎自らの...

まじまじの... 三馬... 三馬攻勢

0470
sent

の一書がある。まゝ三馬の所古義物語、馬琴の讀本を寫
し、そのを目的として出したものか、此者中より馬琴のりやうを
とせしことと、牧場の引用書と別奉して、とて

右日入奉くる所の書は、河古義物語傳述の爲め
引き用ゐるといふも、目録下二條に半と云ふこと
その他添ひの書目と載するに、廿一の語、こゝに
どりの語を、自ら大方の元を合する、似たり。者

冬森山の就心者か、まゝと、七と云ふ、右左の腹を穿
へ、錦の袋に友石を包め、さき著しく、不器を其處
を、橋物の招牌を打たせ、松え忍ち下平心者
と寫り、一身の米櫃自らの空を、

まゝとまゝの、まゝと馬琴の、橋を、打ちと寫し、

馬琴の讀本を寫し、そのを目的として出したものか、此者中より馬琴のりやうをとせしことと、牧場の引用書と別奉して、とて

ハズ、似り原文に物泥す、ハ後者、興味するを教へてある。
任内迄是れ、七休福の心をや、時一休の集や佛を
をいぬり、回し比、天のそまのうを、教へるの委しいこと
ゆゑ、あつた。唯此ア、千ウコナウを、嗔り、廻り、都人の
よふを、様う、いづ、風を、まへ、中、是の、と、あつた、も、三馬
の説と、若、命を、命、い、あつた。

一月二十一日記

○上代、又、湖、と、い、この、四、も、信、儀、の、事、を、隠、し、し、を、せ
ず、文、献、も、あ、ら、う、と、記、し、し、ゆ、ゆ、七、露、骨、又、方、か、れ、あ
つ、埃、及、の、古、蓮、葉、の、聖、書、と、い、い、春、書、が、あ、つ、た。マ、ホ、ソ
ツ、ト、田、教、の、聖、典、と、い、う、ら、ん、て、あ、つ、た。コ、ー、ラ、ン、と、い、う、信、儀
の、記、事、が、多、く、述、ぶ、其、の、宗、派、の、目、の、流、が、後、世、に、
削除、され、とも、あ、ら、ん、と、あ、つ、た。又、男、女、の、交、儀、ハ、人、道

信儀

の、最、も、大、切、な、こ、と、と、い、ひ、み、た、か、ら、上、代、の、人、を、い、ひ、
隠、す、必、要、が、無、つ、た、と、あ、つ、た。日、本、の、上、代、の、お、と、
り、と、神、の、歴、史、の、あ、つ、た、と、い、ひ、記、に、信、吉、の、あ、つ、た、
こ、と、を、い、ひ、し、る、事、も、あ、つ、た。今、一、例、
を、古、く、記、か、ら、奉、け、し、し、神、武、天、皇、の、條、り、に、大、久
米、の、命、が、天、皇、の、報、告、を、い、し、し、美、和、の、大、
物、主、命、が、三、島、の、湍、^湍の、女、勢、夜、院、良、比、賣、の、岩、
邊、の、美、大、籠、り、を、い、し、し、美、和、の、^湍、^湍、入、る、時、丹、塗、
矢、に、化、け、て、厠、の、溝、下、か、ら、美、人、の、隠、形、を、突、き、
出、し、美、人、の、怒、り、を、い、し、し、走、り、出、た、美、夫、を、床、の、邊、に、置、
く、こ、と、を、い、し、し、忽、ち、籠、り、し、き、壯、夫、と、い、う、こ、と、を、い、し、し、
と、い、う、こ、と、を、い、し、し、良、伊、行、政、に、及、命、

自説の信をうきとあり、江島が死病にかつた所の
消息を尋ね、その内容も浮難いので、江島を慰め
たものらしいと云ふことあり

一 四内の下給

（四十）
平水館信の付く枚数十枚
のさきをわが方の改味し、自合の集り、或許
此程のよきあんばい、是れ、海くんと、あまのあゝとさ
の便りとも買入（北給根元がわが方の新巻あり）

一 活字やあまの巻

一時は大改の行とに新巻とを押し合
のち、活字やあまの巻が「二宮尊徳」を起す
北給根元枚数、る四十枚あり、自合集

の文藝家の手札を集めつ、自ら折柄と云ふ
七條あり

一 活字研究

えい、活字史の分り、日本の活字史の
昭和八年、末と九年の三冊、そのうち、自
合の活字の発行が、今も、活字といふ
あゝ、と云ふ、とて、活字に入る。

一 Book Review

洋本の婚文、これ、一ツ、死者、千八百九十六年
ロバートと云ふ人の編、婚文、書札、改味
の、婚文、書札、改味、書札、改味
の、婚文、書札、改味、書札、改味
の、婚文、書札、改味、書札、改味

周延下伝

上文四肉の下伝も得た四音の文の巻に於て
 由延の下伝と耀ふこと一画に納めあり枝
 數百を超ゆ、改述はやその下伝もあつた
 必敬重の傳傳三枚續きの下伝三画
 あり、他に社々の傳あり多し、若重三由
 延に其つたや説家の書簡五張りつた
 あり、其人の書名未だ知らず、由延ハ
 四肉同時の傳傳の家也

○此の書も、以重書詞抄と執筆す、いふに、兼
 の及傳の以十九年、其の妻人が傳を著し、傳又傳

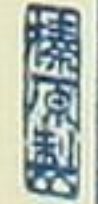


て出傳り、よしが、今、稀觀の書とす、此、出版時、目録
 の所持し、そのれが、よしく七數、同し、そのゆゑ、此、かく、傳、又
 此、今、復、ん、ん、ん、ん、紅、葉、の、音、の、容、を、振、する、が、如、く、
 兼、重、の、し、と、お、の、の、感、概、の、極、く、ま、い、う、く、の、千、紙、の、由
 三、の、書、の、係、を、神、の、心、を、行、く、の、材、料、也、也、大、体、の、流
 の、病、の、露、の、れ、の、の、書、簡、が、多、い、り、か、病、の、消、息、の、語、の
 七、の、が、よ、く、不、治、の、瘡、腫、と、宣、告、せん、と、流、石、の、例、の、病
 瘡、も、記、す、と、思、慮、も、云、の、よ、く、不、に、又、上、け、れ、不、か、あ、る、病
 況、や、覺、悟、に、就、す、と、記、す、と、思、ふ、べ、き、に、か、神、心、の、材、料
 の、ゆゑ、と、思、ふ、と、節、と、を、次、書、せ、ら、う、と、書、き、し、つ、く
 九、八、三、十、三、年、十、二、月、十、九、日、在、お、の、出、立、谷、の、波、に、書、く、と、
 書、簡、を、始、め、迄、と、又、後、書、も、有、る、書、簡、の、面、白、く、

小波ゆきのはついで千紙の内

金うすい此の為月因葵の跡を自分の如きまじき
候ち候らんかき一都念の出来の目高のまじり入流
の上小使に差支へ候やうきまじり電あつた
まじり電カハまじり電一うと二万圓の面
出来りし然し内地より候古茶都念を御
馳あは成るうきまじり候成るに其地を御
みまじり候らんかきまじり都念をまじりやうきまじり無
家打電あつた

實に北金部より助け舟に押出し、か、くも天長寺
紙上と紙下り候らんかきまじり候成るに其地を御
まじり候らんかきまじり都念をまじりやうきまじり無
家打電あつた



のうきまじり

病家の病案か念に胃瘧と決す前十二日河入浮内
科へ入院し病愈の決意の時、まじり候成るに其地を御
馳あは成るうきまじり候成るに其地を御
まじり候らんかきまじり都念をまじりやうきまじり無
家打電あつた

昨日に退院後の病見も被下候候に候由中
悲痛之義を候て、賤恙に就るに候らんかきまじり
候成るに其地を御馳あは成るうきまじり候成るに其地を御
まじり候らんかきまじり都念をまじりやうきまじり無
家打電あつた

心塵ニ有之候(中略)是れ其内一日清濁法申上ら
候くま家内こたくしん多候に其略を清く候取
花咲く候を物く候生年向の一句是れ清濁
申上候入院中既ニ天命を受候し安んま命の
地を得候と候る物氣を罷れらる決し七清情
み祈らるる候云々

こゝ生年向の句を安んま候又三月廿四日申上
當此つ以者中申上候しことかえり

先口物つり、言他、病愈ゆるの口を待つの表こゝ
今日の境遇うや、不白、ありし言更、清一化生を
なれし余を申上らるの言懸拜受政分、清氣
かゝりしき日何れも片、被らる候友ま生ま

御友ま生ま

向と移し一白く候しん生七何ん得表の一句
辭世ら候らるとあし下候んくも又公の言の
何れ流らま云々

とまふとあま、ろふ美か病中、の心境を極し二即如
若杉沙こ其つれ手紙に左の如くある

中申上候生流候る物氣自在なるよるを念に
魚あつ出る車も目覚め相と仰り火と也
夕もさとと輕きこと重し如く静るる又あつ候
心中一點の塵念毎く人間の責任といふよを
取れ悠々といふ候を今日の身のま始と悟り候
やうの境遇從てこの塵念を清く候しん
又このいつをもあつ命決しん清濁みら

くやう歌子

とちつて病をなきてぬ切つてある、その他に病中、殊に
不沈念の断念を得た際の消息を語る手紙の福
田和生より、其のたゞのよるくしめる。(三十一日三月十四日)
おね本。十年前時廿八日退院仕え、之ころ一時、前
入洋場士として在院十日間、断念試験に就て
如き結果の報告を多々ける。運拙くも彼
日腕内の腫瘍、セントヘレスの古英婦をも腫
せし不沈の胃瘤とお救りし、来山が「花咲
いと死にしまらぬが病はなほ今更ぬるも
為人やう無き。但死して申さる不孝中の幸は
良世との事、こゝろ、早晩之が為る。靖とべ

福田和生

き、天命と受候もてる、

譽の鳴く春遊いと夢に見

而して病高、一カを下すべきや否や、唯今胸中の大
聲、おき、從而一日も攝生を忽ちす可き、
わん物用心の身に候、今百子の果を抛ち
果実の焼と信す、静養、心掛て、と
委細、又、可、身内、病骨、と、
け、入、院、中、
僅に一句、

何れとて命たきの真

伊治松守、世に、左の如く、
あ、此、同、三、五、年、月、七、日、

去る六月二日五時おつこむつを口はひし壽命をまふに
七月に入つ候に此のまは候かいくらぬかみちなるか
うらぬかえん口ま入るまは海物のえんか(心
身心共におかぬかたふかぬかぬかぬか
此手紙のあつた

山果一向七をい紅糸金糸なる者の海果やら
石筋文粹の下巻の訂正やら、ローにたいら及た
らゆかえんかたの印刷やらあるかあるか。申能
ひの意欲中やらはたきうく大病人といははぬ
まの剣もたかひる知れ家もたかひるかたも
いきうくたかひる知れ家もたかひるかたも
改乱す。瑞利院にたかひるかたも



あはれかたのあつた

可しよく苦者なるかたも少くつ、働し
たかひるかたも生延びるかたも不難かたも
日の物所、瑞き、三六の親友相集るかたも
をあたしくかたも一かたもあつたかたも
るかたもあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
の一言もあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
仕事もあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた
かたもあつたかたもあつたかたもあつた

過之合笑入地の大あ心を得候も畢竟是れをの
力世も大なる事と有り本座の事と御座
ま生も又事の長くしもの成るも先を死に
るは道すく無念と御座

………

予が此處を得る人々悪念又の異念の因果の
やうにござん候がなほ何事と口惜う御座し文
帝の為にわ身を危く致しおろす今
死にわく七生も世に出るおろす色りの
又事をも書き申す七の世も執着の御座
先

流るくこの清いぬえさ



お美の波味性も能文とか修んれ文の標ちよふべき
ハウと云●松油に定るも左の文もせせめさう

三丁の年四月十六日の吉札に

今朝の御座る………と晩紅糸係を早め春も
結々清艶と極の振上の眺望千三上の致者も
候し高船の敷きつじと朝候まじに刻き早
速開候あえい………形と云ふ御座るも
紅白と打合の………更………好く大改心せぬ
布の紐を用ひ………更………ぬ………
の品が春風の………朝………候し候し候し
趣………一層………極………唯恨………
引張合の加減………行の………四………試み

にいつれ七成切せしむにやり方の不換るに故もあらず
けんじは拙もさるるまゝあらずや偶家もさるる家
錫の白濁を甲虫口よりみえ古生をそはつてを
こいへ人多くをとりしと故とすも癡勢有
えいがこの辻古の叔向似之朱唇とねねしけし
ふを引き公ふといひの有情の歌をかきし思
付と返心改てく知も実隆叔向はどこうも
ゆかぬの残念有り

おまのよきとさるる言近也其文も古傳の如くけし
の言近とめをさるる

おまの大事一片の挨拶の書く千紙のゆも勿体さるや
ふ美文のゆもさるる言近と改讀を弄しとめをさるる

俱に墜るまの不のめがあるおまの言近もあらず持て免
せする人を罵倒するが此の言近あらずのめさるる
一もせもあらずおまの言近もあらず紅美も
常々余の千紙を免れ友人中千紙の名手もあらず
一紙と自分も揚げられたかあるが自分紅美も勅出
れて千紙の姓後体は二一層の前後を流しとすも
適したこともあらずおまも其言近もあらずやうれが女
の大患に思惟つても何七紙も駄目とさるる言近も十年
も生きたるも自分注文のやうさるるか出来れと一紙も
美かいうま珍什とすも文界も言近もあらずか人
の性格は其人の言近もさるる現はさるる言近もあらず
人の紅葉を今もさるる言近もあらず言近もあらず

○山形縣楯岡の書封家の遺蹟を模して獨力回考館と建設し
て之を碑とす。只切實を新しんとして又承る。故に儒士が
文を撰み自ら題款を書いたる所を故蹟の今より其建
碑の多しを漸く建碑の運びとす。つれとす。其
遺蹟不し。氏が出系し。和四島又の撰文に於て其
ことらふ。と云ふ。此の半公短偏の稿ひある。其
金石文とす。ハ不妄のものが少くする。其の
少くする。

山形縣

山形縣楯岡町素封吉早彦太夫少壯大志あり
初め隣山村白石氏米澤市片山氏の家塾に學び
明治十六年東村山郡東京に遊學共立英和學校に入る在
學中頻りに舊聖書館の東京書籍館に登り神
習大いに努め深く圖書館の利澤感す思へり
他日御里に一館を設けて郷堂日々資さんと業
成り得御の後宿志益々鞏固く大正八年五月七
日陛下
今上御成年式奉行に際し決然宿志を果さんと
し獨力建築起工。着工日九年十月十日竣工を

○此方自ら日本製備の漢方也。岳の米國大一座のダシスセ
欲に此前のマース、レヨウ一座と比んば、其許上品の
枝七條つゝあるやう思ふん。左にプログラムを添へル
おと。

一月三十日記

○南洋福島の伝説を考いたるハルビーの事
 が出た。此島は、三哩幅の島と云ふ。此島は、
 島中のあちあちの所に、海抜一メートル半と云ふ。波が
 時々、時を洗ふの如く、家の窓縁が、高く出来てゐる。此の様
 下から、夜合と云ふと、マングロフの木と心つた。夜合棒
 と云ふを、昔年、が女を挑む様な、下から、つき出さ
 此棒、各人各様、種々の、彫刻が、してある。一つは
 同じ彫刻が、あるから、女は棒を、見ることも、誰か、誰か、あるか
 を、見る。何れ、男も、入つた男、か、女子、ハ、流す、か、流さ
 ず、男、と、棒を、押し、戻す、の、男、も、男、ハ、よく、偉つ、て、行
 く、と、ある、が、夜合棒、とい、お、わ、い。



は、クレイトンがベギイと
 を恐れ、彼が或映画女優と
 のです。で彼女はすつかり
 失望してレグエウ園に加
 はり地方に巡業に行つて
 しました。そんなカ
 ラクリを知らぬクレイト
 ンは、その女優の内縁の
 夫に、誤解され殿られて
 了ひ、人気ががらりと落
 ちてしまいました。その
 経緯を知つたラツシユは
 彼を憐み、ベギイとの仲
 を直すべく狂奔します。

× ×
 × ×
 × ×

彼
 バット・オブライエン
 フィック・パウエル
 ジョー・ロジャース
 アレン・ジェンキンス
 ランド・ミッチェル



- de No. 5 I'm Terrific When I Get Hot..... Myra Mason
- de No. 6 Without A Song....Tommy Jones
- de No. 7 Take You Roller Skates Along sung by Ty Parvis and Myra Mason
Rolling Along with the Hollywood Studio Girls, featuring Passeau and Lee
- de No. 8 How'm I Doin' with Ty Parvis
- de No. 9 The Silent Humorist.....Eddie Gordon, assisted by Janey Murray
- de No. 10 Steps on Steps by Jack Lester
- de No. 11 Rhapsody Moderne with the Hollywood Debutantes, featuring Anita Lou and Tommy Jones
- de No. 12 Sayonara with Marguerite Hartwell, Dave Hacker and Jack Lester
- de No. 13 The Acme of Sustained Motion.... Jerry Coe
- de No. 14 Madame Butterfly sung by Pauline Guthrie
- de No. 15 A Japanese Garden
Introducing Lottie Mayer's World Famous Disappearing Water Ballet-Twelve American Diving Beauties direct from The Century of Progress Fair, Chicago

彼の人気は大したもので、就中、御婦人連には大變
 彼女に勧められて契約をしました。實力を發揮した
 うなるとベギイが失業するので、彼は躊躇するの
 に入つて、彼は雇入れられることとなります。併し

YOSABURO SUZUKI and TAMEO KAJIYAMA
PRESENT
RODNEY PANTAGES' and ARTHUR SILBER'S
PANTAGE SHOW
"HELLO, NIPPON"

Overture.....Selected
Margaret Jasper and her Six Counts
of Rhythm
Master of Ceremonies.....Suisei Matsui



ACT ONE

- Episode No. 1 **Rendezvous of the Stars**
Introducing the Ladies of the Ensemble Specialties by Dave Hacker and June Sidell, Tommy Jones, Suisei Matsui and Janey Murray, with Gene Herbert at the piano.
Sophisticated Lady by the Ladies of the Ensemble
- Episode No. 2 **Hotcha** by Myra Mason and Ty Parvis
- Episode No. 3 **Emperor of Accordion**... Jerry Coe
- Episode No. 4 **Heat Wave** by the Hollywood Studio Girls
- Episode No. 5 **Professor Hipasnozzle** introducing Dave Hacker and?
- Episode No. 6 **The Night Was Made For Love** sung by Pauline Guthrie
- Episode No. 7 **Roping Them In** with Pascale Perry, introducing the Hollywood Studio Girls in a novelty rope number.
- Episode No. 8 **The King of Triple Rhythm**..... Jack Lester
- Episode No. 9 **It Must Be Mutual** with Dave Hacker and June Sidell
- Episode No. 10 **Cherry Blossom Ballet**
Starring Miss Ada Broadben, Premiere Danseuse late of the Roxy Theatre in New York City and the Hollywood Bowl.

—INTERMISSION—

ACT TWO

- Episode No. 1 **Hella**, a tropical Hawaiian Dance, introducing Ty Parvis and the Honolulu Babies, featuring Myra Mason
- Episode No. 2 **Raggedy Ann** by Anita Lou
- Episode No. 3 **Lady of the Evening** with June Sidell, Dave Hacker and Jack Lester
- Episode No. 4 **America's Premier Exponent of Fancy Shootin'**.....Pascale Perry assisted by Lillian

- Episode No. 5 **I'm Terrific When I Get Hot**..... Myra Mason
- Episode No. 6 **Without A Song**....Tommy Jones
- Episode No. 7 **Take You Roller Skates Along** sung by Ty Parvis and Myra Mason
Rolling Along with the Hollywood Studio Girls, featuring Passeau and Lee
- Episode No. 8 **How'm I Doin'** with Ty Parvis
- Episode No. 9 **The Silent Humorist**.....Eddie Gordon, assisted by Janey Murray
- Episode No. 10 **Steps on Steps** by Jack Lester
- Episode No. 11 **Rhapsody Moderne** with the Hollywood Debutantes, featuring Anita Lou and Tommy Jones
- Episode No. 12 **Sayonara** with Marguerite Hartwell, Dave Hacker and Jack Lester
- Episode No. 13 **The Acme of Sustained Motion**.... Jerry Coe
- Episode No. 14 **Madame Butterfly** sung by Pauline Guthrie
- Episode No. 15 **A Japanese Garden**
Introducing Lottie Mayer's World Famous Disappearing Water Ballet—Twelve American Diving Beauties direct from The Century of Progress Fair, Chicago
1. Tokyo Kappore, sung by Miss Kohara Tamano
 2. The Disappearing Ballet
 3. The Dance of the Nymphs
 4. Fancy and Acrobatic Springboard Diving
 5. Trapeze Dive
 6. The Jewelled Fountain

—FINALE—

Managerial Staff

Manager.....Arthur Silbert
Production Manager.....Ada Broadben
Stage Carpenter.....William Scott
Stage Manager and Electrician.....James Armstrong
Wardrobe Mistress.....Genevieve Scott
Musical Director.....Margaret Jasper
Entire ensemble numbers conceived and staged by Ada Broadben under the supervision of Arther Silber.

下から夜合のころとマングロの木の心は夜這棒
とよふをち年が女を挑むえん様の下からつき出
此棒の各人各飲れ種々の劇劇かしてあるのひへつ
田に航刻からいから女ハ棒をえるともんが誰か
をちりり切り、男ハ入つれ男かと女子ハ涙するが
ヤリ男ハ棒を押し戻すのひも男ハ、エく偉つて行
くとあるが、夜這棒といおかし。

名人氣質

光雲翁の少年時代

高村光雲翁が佛師東雲の許に在った小僧時代のこと、妻君が各ん坊で翁には容易にうまいものを喰はせない。ある日のこと、肴屋がやつて来て鮪の刺身を買った、如何にもうまさうだ。が、自分の口には入らないのだと思ふと、翁はいまましいこと夥しい。と、妻君は井戸端へ洗濯に出かけていつた。翁は「此時だ、え、いッ喰つちまへ」とばかり、鼠入らずから取り出すや、醬油をぶっかけ、手掴みで早いところペロリと喰つてしまった。そして勝手元に轉がつてみた大根の尻尾の先を削り、泥を塗りつけてそこらへベタベタと押した。猫の足跡そのまゝなのだ。

仕事場へ戻り、素知らぬ顔でコッコッ鑿を振つてみると、やがて妻君は涼しい顔をして井戸端から歸つて来たが、見るとこれはしたり、鼠入らずは開けつ放して刺身はなく、落花狼籍、
『まア呆れ返つた、三毛がお刺身をみんな喰べてしまつたのだよ』
と、頓狂聲を發して憤慨すること一方ではなく、縁端に寝てゐる飼猫の三毛をいやといふほどどやしつめた。ニヤンにも知らない猫こそいづらの皮だ。

翁は此時ほど溜飲がさがり、痛快味を感じたことはなかつたが、刺身は早いところ喰み込んでしまつたので、味はてんで判らなかつたといふ。それにして富意即妙大根の尻尾を削つて猫の足跡にするところなどは、後年の翁の面目が躍如たるものがあるではないか。(閑々亭)

○食道出とふ能法江見ぬ後之速く此有
の女優と信つて書かぬもふもん江見が好んぬ
あ合を催しとふことば春の浴びとしいふ
さしいことばが雨天の時室内に擬拵あ合を
催しとあるがぬるの事也

今思ひ出しても懐かしいのは、毎年春の摘草時になると私の大好きな摘草會をキツト催して下さいました御承知通り江見先生の角力は有名なものでございますが、其頃學生さんが澤山角力の御弟子になつて居られました、其人達を皆誘つて大勢で押出す騒ぎでした。

どうかして楽しみに仕切つて居る當日雨でも降らうものなら、早速に春の野邊を書懸にした丁度芝居の大道其其まゝにお家の内をこしらへて柱は全部「道しるべ」に見立て、襖、障子は全部はすして了つて疊には芝草に見える敷物を敷きつめ、嫁菜、たんぼ、つくしなど皆書で書いて全で野原の通りにして其處で鬼ごつこや、子取りや、其頃盛んにやつた遊びをいろ／＼やるのでした、時分時になると、奥さんの御手料理がこれまた、お重箱へきれいに詰められて、どうしても春の野邊の遊びと言つた感じで實に／＼面白かったです、そうした趣味もお弟子の内に本物の畫家もあれば大工さんもあると言つた工合で實に美事に出来上るのでした、遊びは全部女一人の私を中心にして下さるのでなんの事はない私は宜い氣になつて全で俄鬼大將になつて騒ぎ廻りました。江見先生のお家の摘草會と申したら有名なものでした近所隣り

でも其騒ぎに思はず釣込まれてのこ／＼出かけて来て仲間へ入れて貰ふやうな人もありました。

物本を約らむのりうかり論と無んこと深なるるのわお留の
 場を記しに印刷物か書行きんれ河美源の記とんれ大
 名の釣七抄のしうしんれかてサカ空想を書いれしんれわあ
 さい。こんる本をせなと流れん
 馬鹿大名の面目雖も、詞も

大名の美か
 を描く
 ひろ

我國で釣魚が最も盛んとなり研究する域
 にまで發達したのは徳川時代からである。
 例へば享保三年に七十七歳で歿した津輕安
 女正の著作になる『釣魚秘法河漢録』中に
 掲載されてゐる釣魚の如きは、各釣人の工
 夫に係る何々流釣として三十餘種が挙げ
 られてゐるのを見ても明瞭で、寛文から天
 和、貞享、文祿、寶永、正徳、享保へかけ
 て、青鯨釣は今日以上の隆盛を極めたので
 ある。また元祿全盛の頃には、江戸本所堅

川の置材木の上に金屏風を立て廻らして、
 茶器から酒食萬端に至るまで贅澤の限りを
 盡して用意させ、身は錦緞の座蒲團に坐つ
 て、金銀の象眼を施した當時の金で百兩以
 上もかけた、しかも僅か一尺餘の小竿に、
 その頃の名妓などの生毛を釣糸として、侍
 女に蒔繪の印籠から練餌を出させて刺さ
 せ、漸く二寸餘の鯛を釣つて興に入つたと
 いふやうな大名もあつたといふことであ
 る。従つて當時の徒食者達が花街の遊興に
 倦きた果に、釣魚趣味に遷つて行つた者も
 多く、爾來釣魚熱は益々盛んとなり、化政
 度から天保にかけて實に驚くべき流行を來
 し、釣魚に関する書物も多数刊行された。

釣魚の歴史

昇

○先頃勤王と酒と題して近衛家から春の天宮く
 酒を献じたことを書いれんれか今い文祿と酒とわいふ
 べきことを書いてる。近衛公の終身之倒白の
 つしか、其飲地の酒の醜もして名を白の攝の果
 である。當時醜酒家が多くとつんれか別れんれ
 醜家と大守家がある。井原西勢の其後、伊
 丹池田の生う酒家大和家尾の守人れことを
 しく語る。名り、其執の社を屋を座するものかあつた。
 老七高村侯であった。お通さうい。伊丹もも同く
 盛んにおらる。伊丹流と鳴る。能登が起つた。これをたし

○ 菅ノ草ノ川柳を見よ
名ノ如キイハカ
有テ大徳人
也
○ 勝美の川柳
見よ
名ノ如キイハカ
有テ大徳人
也

と記つれ。

洗髪脇の衣から人を呼ぶ

辛味波女も一ツつけれき紋所

鏡より見えぬと下女もあたるつり

上草履思ひせぶりの音心すま

蜘蛛何の怪氣を前かま

下女か恋拍子あたるの七かげん

若武者を圍ふ馬に困り入る

若殿を差ぬきまきの乳母振

胸の代があれまきくみま年の時

ゆえの苗守まき下女に子と合し

聖のいし替の三十日まのけし

形をとそまの山利も悲しま

たぐくかま盟へゆふまき

初の子を客の合にま抱つて出る

今の子の出来ごと文も手古下り

女師の九九をおぼく針仕

梅の世といへハ頭をつきつり

胸世帯を掃ると脇の生きたる来

女房を持れぬかま且那也

竹井之文上落正が重安の輸出品なるべきことを、茲に附記
し此の續法を事す

自公の遺著のこのことと言ひたこともあるが、改
題法大日本に於て、現解の出来さや其
のことも書いとて請求を乞ふべし、此の
此やうな事だが、英洋を乞ふ事、此の
のび、守手と書くと改訂せしむることも
枯木作、不や、意心、まこと、此の
して日本、い、ど、う、も、出、て、く、言、事、如、利
唐、ま、ん、を、現、い、ら、や、う、な、洋、海、か、ら、い、



○昨昭和九年から本年にかけては、法施徳の敷に、徳
華と甲戌環海并、我、多、法、の、予、か、の、記、さ、る
雜記に、○氣、著、と、し、隨、著、と、し、と、今、ま、ん、の、復、二、冊、の
隨、著、と、し、る、が、坊、舎、に、依、り、て、い、ご、こ、か、ら、う、出、し、て、又、
う、か、免、の、角、其、目、次、を、書、き、記、し、て、回、覧、す、と、為、家、が
あるから、又、大、眼、を、穿、け、る、○印、を、附、け、た、よ、の
ハ、法、施、徳、の、寄、せ、れ、よ、い、ご、ま、り、切、板、の、二、冊、の、ア、ン、ハ、ム、の
帳、り、つ、け、も、あ、る、無、印、の、も、の、前、掲、の、法、施、徳、の、如、の
如、の、北、方、ハ、原、書、と、ま、ま、ら、ん、書、き、と、し、て、今、ま、ん、の、復、
か、し、ら、る、と、い、い、

○和田恒吐書
通人國馬十連

○愛樹感
○馬産一百人を復す

- 見聞と類する小品と楽
- 眼
- 書藝の遺法
- 維新の元聖墨蹟法
- 魯庵の法酒
- 狩谷極市
- 幼時の田園生活
- 郷土愛
- 池の酒の初
- 水言葉の思ひ出
- 山の美と認識
- 森井瓜屋
- 瓶書漫筆
- 魯庵の法紙魚漢
- 不忍池畔を徜徉し
- 狩手紙
- 事久後の魚
- 姫お笑境漫筆
- 飢歌をき裸林家
- 水言葉少人
- 書と手紙
- 日本偽書一現
- 茶人の心境
- 瓶書生活

藤原

- 酒と勤王
- 偽書物語
- 外國へ出たえん日本関係の偽書(書事)
- 和田橋士と悼古
- 外人の竹と鏡
- と兒の心境
- 書藝の風味
- 書藝とえんおまふ
- 恒の礼讃
- 早稲田の荒漫歩
- 鐘教
- 瓶書経歴
- 師土愛
- 左義長の伝
- 倉ら平上の水徳
- 今ニ千キ及た浦へ
- 伊加山あぬ記
- 小物屋法

四三

大隈侯、大名家のり(長)

彌十郎の銅像

三馬と馬場

川柳とてんぐすた

彌十郎の歴史と浮城

フルベッキと雪村

下田港と伝承の記

久里濱、油とを伝承の記

丹那トコガレ

修善寺と伝承の記

行状

酒評六十則

日本趣味漫談

酒と文藝 伊丹の伝承

灸と柔術

三馬の浮世風情

長崎の風

八幡と國十郎

禪と世帯

酒の経歴

擬産

酒心祝を説く

梅の歌句

柳北の遊藝談



伊達家空の家南

坂立空のり

白檀と世帯

伏子の家史

日持の伝

寺崎の伝

又の難句

大に死の伝

一宵の物語

エゴ一生活の物語

西村家史の伝

墨風の村木と伝承

又の伝の伝

茶の伝の伝

ナスグシ

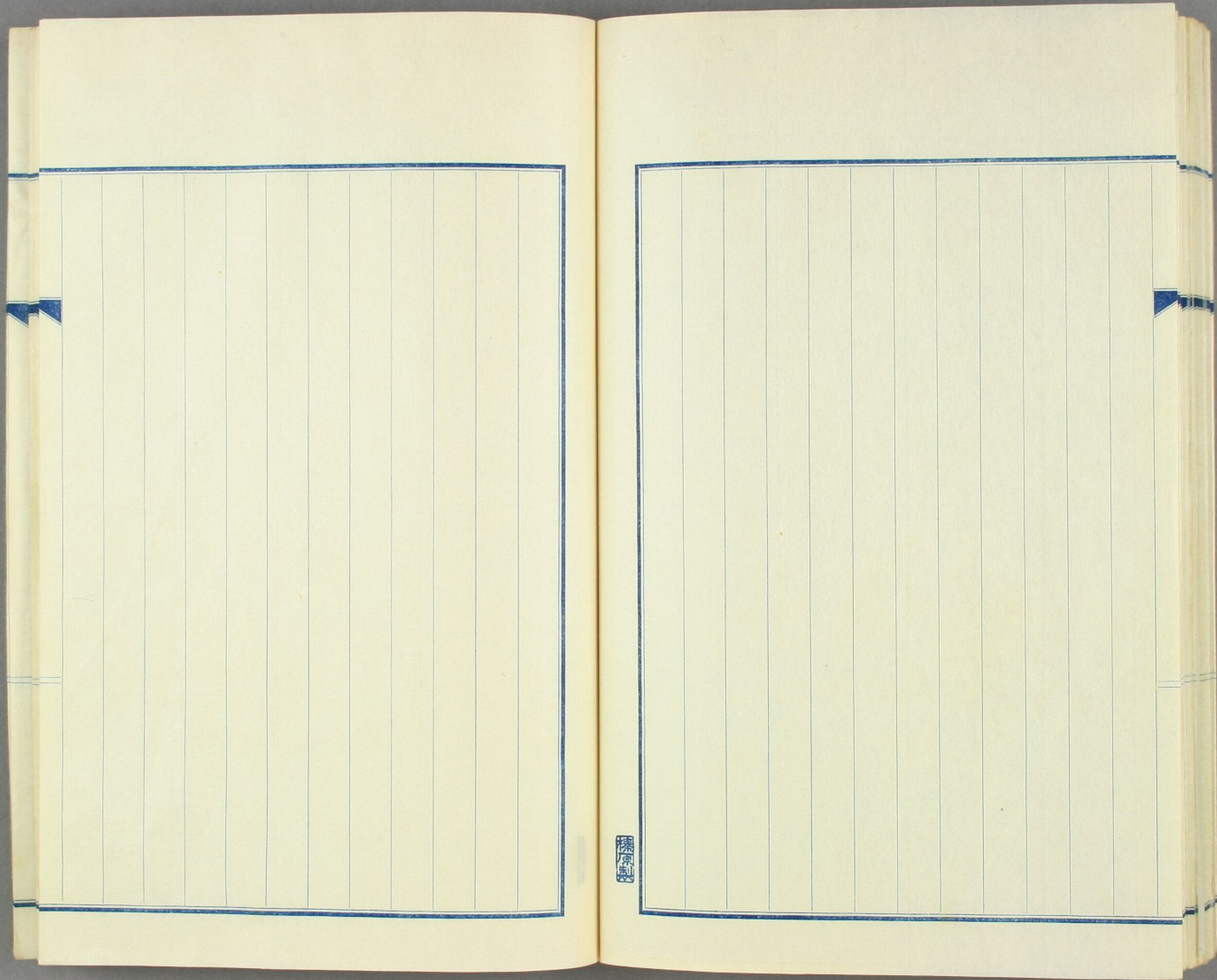
芝居の伝

又の伝

手ひめりの伝

茶と伝

似木



Small blue stamp or mark on the left page near the bottom edge.

以下
10丁
白紙

趣味

一年四回分 四圓 (送料共)
第一輯 新春號

第二輯 風流號

一、風流の研究 評論隨筆 (四月上旬發行)
二、生活問題と風流の検討

健文社

日時 昭和十年二月二十二日(金曜日) 正午開會
會場 日本橋白木屋ホール 午後五時閉會



招待券

第一回 日本趣味講演會

主催 「日本趣味」同人
後援 白木屋社



日本趣味

◎講演會次第

- 一、開會の挨拶
竹内 尉
 - 一、風流のスタイル
長谷川 如是閑
 - 一、風流と良寛
津田 青 風
 - 一、美の認識
北小路 魯 郷
 - 一、支那の風流味
後藤 朝 太郎
 - 一、趣味の室内美
藕 月 左 青
 - 一、題 未 定
市 島 春 城
- 以 上

日本趣味は日本人の心の食物である。われ等の祖先はかなり長い間、この食物によりて養はれて来た。

明治の初期から西洋の文化に陶酔して、趣味の歐化が行はれたけれども、それは日本人の魂の底まで満足せしめなかつた。日本人の魂は結局日本趣味といふ故郷に歸らなければ、満足しきれないであろう。歐米先進國といふ目標の置かれてゐた時代には、趣味の歐化も亦止を得なかつた。

しかし一九三五年は世界に於ける日本の一轉期を劃すべき時代である。日本精神を發揮して日本を世界に示現し、日本主義を鼓吹することに覺醒すべき機會が到來してゐる。國民は外をみるよりも、まづ自己をみるべきであらう。

自己の祖先が、長い間養はれて来た心の食物であつたところの、日本的なものを再吟味しようではないか。

われ等の祖先が味到した東洋の美しさや、深さや、強さや偉大さを味はうではないか。そして新しき教養によつて再認識してみようではないか。

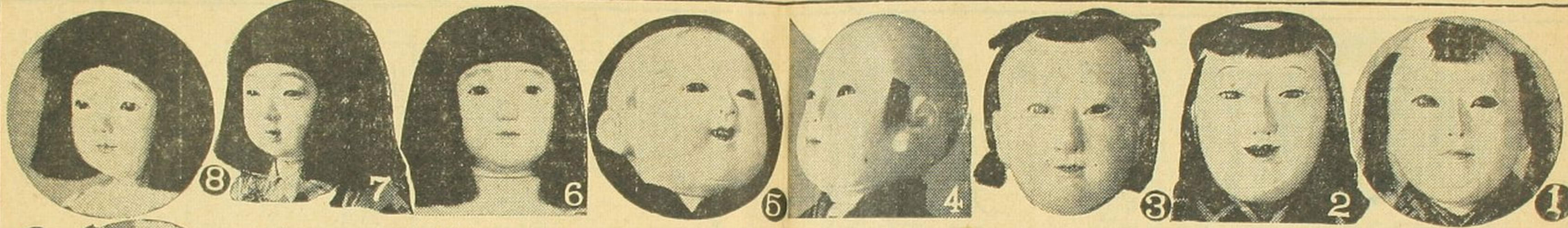
本誌は日本趣味の綜合的淵藪である。一九三五年の國民的必讀書である。

◆本誌は東洋の趣味と、深味のある趣味の世界層へ觸れてゆく、古雅風流なごいふ言葉で現はれる東洋趣味を鼓吹して趣味家の共鳴を求めらる。

◆本誌は趣味嗜好に關する一切の報道、評論、隨筆を掲載する。書畫、骨董、陶磁、篆刻、刀剣、金石、茶、香、插花、芝居、寄席、武道、園芸、将棋、釣魚、飲食物、各種の蒐集、古本、盆鼓、詩、和歌、俳句、謡曲、國畫、歌謡、(清元、義太夫、香澤、新内など)乃至は偏墨趣味など、およそ人の好みに關するものを網羅する。

◆隨時趣味に關する座談會、講演會を會館する。評論、隨筆、報道、挿繪など讀者の寄稿を歓迎する。種類長短を制限しない。その好所に從つて研究または体験の記録を寄せられたい。





時代のながれは お人形さんの顔に

人形師の頭に刻まれた幻影
山田徳兵衛

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ らか期初治明 遷變の迄ふけ ☆☆☆☆☆☆☆☆

人形の顔にも時代の流れがある……その時々、人形師の頭に刻まれた幻影(多きは細君の面影)が自然と顔立の上に見えるものであるといふ事實を由述べるならば、故意に變化させずとも、必然的に時代々々の人の顔と共に、移つて行く事がお判りになります。

☆☆☆☆☆☆
最後に「日本人形は、その人形師の頭に刻まれた幻影(多きは細君の面影)が自然と顔立の上に見えるものである」といふ事實を由述べるならば、故意に變化させずとも、必然的に時代々々の人の顔と共に、移つて行く事がお判りになります。

家庭だより

☆☆☆☆☆☆
①は當時の東京……殊に下町好みの顔であります。幾分長めの顔、そしてその眼の張り……に所謂愛好者好みを感ずります。以て當時の娘さん方の嗜好を知る様な気がするではありませんか。
②は當時の關西好みの顔です。顔の長さに、口許にどこやらお能の面影を見ます。
③は明治二十年前後頃の顔立です。追々今日の少女に近づいて来ました。それと共に技巧的には寫生に近づいて来た事を見る事が出来ます。
④はますます今日の顔に近づいて来ました。然し何といつても明治の香りがあります。どこやら國芳、國岡あたりの錦……

☆☆☆☆☆☆
⑤は明治の末期から大正にかけて代表的にはやされた「光顔」といふ人形の顔です。こゝに到ると愛好者も、能面好みも影を消して、本當の少女らしさが強く出てあります。技巧に於ても機械的手法と、寫實的手法との漸然たる調和を見ます。
⑦は彼のアメリカとの人形交換の機会に突如と出現した顔です。そして一躍人気者となつた顔です。それは昭和第一の春でした。
⑧⑨⑩は今日多く行はれてゐる顔の各方向を物語るものです。

☆☆☆☆☆☆
⑧(は)更に氣輕さを加へ、動的表情を強めた顔立ち。(これは瑞穂作、(9)は或る表情を盛つたものでボーズのある物に適する顔。(これは南作作)(10)はキュービーさんや西洋人形のくりくした健康的な佳いところを加へた人形界のミス・ニッポン顔。
8、9、10……と、さて日本人形は、どこへ行くといふ事になります。

☆☆☆☆☆☆
⑨
⑩

探原製



鬼も笑はされる

紅毛追儼合戦

豆まきの新風景

○…恒例の豆まき、御時世に染つた新風景は神社佛閣とどりの宣傳にいそがしく「鬼」カ士の年男でももうお宮が呼ばま

せん……など興行部そのけの苦心修練で、各地元の電報會社とタイアップしてのお客収

入はどのことではない「鬼」も笑はせる様な楽しいおまつり騒ぎだ

栗島すみ子に宣傳價値を遺棄した池上本門寺は昨年小唄勝太郎を看板に立てたが今年はその味をしめたため、雑草の市丸とビクターの三島一舞をかつぎ出した

○…こゝでお坊さんらしくない頭を洗えを見せたのは本所兩國の別荘でゴウ／＼の袴を着せられた

○…恒例の豆まき、御時世に染つた新風景は神社佛閣とどりの宣傳にいそがしく「鬼」カ士の年男でももうお宮が呼ばま

せん……など興行部そのけの苦心修練で、各地元の電報會社とタイアップしてのお客収

入はどのことではない「鬼」も笑はせる様な楽しいおまつり騒ぎだ

栗島すみ子に宣傳價値を遺棄した池上本門寺は昨年小唄勝太郎を看板に立てたが今年はその味をしめたため、雑草の市丸とビクターの三島一舞をかつぎ出した

○…こゝでお坊さんらしくない頭を洗えを見せたのは本所兩國の別荘でゴウ／＼の袴を着せられた

○…恒例の豆まき、御時世に染つた新風景は神社佛閣とどりの宣傳にいそがしく「鬼」カ士の年男でももうお宮が呼ばま

せん……など興行部そのけの苦心修練で、各地元の電報會社とタイアップしてのお客収



中...
...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

木堂逸話

▽康有爲が日本に亡命して来て居た時分、彼(木堂先生)と往來して大變親しく交際して居たが、或る日、康有爲は彼に向ひ、貴公の號は木堂だが、拙者の別號は森森堂と云ふのだから、詰り貴公の如き人物を六人合併したものが拙者となるのだと云ふと、彼は透かさず、イヤ拙者一人で貴公等が六人前の仕事をするとやつたので、流石の康有爲も頭を掻いて笑つたさうな。

▽猶一つ彼が青年時代の逸話がある。或る知合ひの男が来て、君も獨身で居るから放蕩もしたくなるのだ、良い妻君を見付けたから一ツ貰つて見給へと云ふ、ヨシ来た合點、世話して呉れと短兵急に攻め寄すので、某も其の性急なるに辟易しながら、イヤ待て暫く其の婦人の弟が居るから、兎も角一度會つて見ると、場處を定めて會見することになり、どんな弟が来るだらうと待つて居ると、纏てゴト、やつて来た、見れば十七八歳の少年で話して見ると中々面白い、又其の少年も彼の人物なるを見抜いたと見え、これなら我が姉の婿として不足はないと、愈々やることに決めてしまつた。ソコで話も濟んだから、其の少年は辭し去らうと立ち掛けると、彼は一寸と呼び留めて、君の姉さんを貰ふに就て、一つ君に心得て居て貰はねばならぬ事がある、外でもない、僕は金の無い時は一夫一婦主義だけれども、金さへ出来れば、多妻主義だから、此邊承知して居て呉れと云ふ、少年頗る驚いて、コンな放蕩者に大事な姉はやられぬと即座に破談して仕舞つたさうな。

その少年といふのは蘇峰徳富猪一郎であつた。

明治三十五年刊行、雪山外史上村才六氏著「新馬創」(當代名士の半面)より抄録。

木堂先生の逸話

木堂逸話

▽康有爲が日本に亡命して来て居た時分、彼(木堂先生)と往來して大變親しく交際して居たが、或る日、康有爲は彼に向ひ、貴公の號は木堂だが、拙者の別號は森森堂と云ふのだから、詰り貴公の如き人物を六人合併したものが拙者となるのだと云ふと、彼は透かさず、イヤ拙者一人で貴公等が六人前の仕事をするのだとやつたので、流石の康有爲も頭を搔いて笑つたさうな。

▽猶一つ彼が青年時代の逸話がある。或る知合ひの男が来て、君も獨身で居るから放蕩もしたくなるのだ、良い妻君を見付けたから一ツ貰つて見給へと云ふ、ヨシ来た合點、世話して呉れと短兵急に攻め寄すので、某も其の性急なるに辟易しながら、イヤ待て暫く其の婦人の弟が居るから、兎も角一度會つて見ると、場處を定めて會見することになり、どんな弟が来るだらうと待つて居ると、纏てゴト、やつて来た、見れば十七八歳の少年で話して見ると中々面白い、又其の少年も彼の人物なるを見抜いたと見え、これなら我が姉の婿として不足はないと、愈々やることに決めてしまつた。ソコで話も濟んだから、其の少年は辭し去らうと立ち掛けると、彼は一寸と呼び留めて、君の姉さんを貰ふに就て、一つ君に心得て居て貰はねばならぬ事がある、外でもない、僕は金の無い時は一夫一婦主義だけれども、金さへ出来れば、多妻主義だから、此邊承知して居て呉れと云ふ、少年頗る驚いて、コンな放蕩者に大事な姉はやられぬと即座に破談して仕舞つたさうな。

その少年といふのは蘇峰徳富猪一郎であつた。

明治三十五年刊行、雪山外史上村才六氏著「斬馬劍」(當代名士の半面)より抄録。

蘇峰徳富猪一郎

勝舟海先生と私の父

理學博士 故 石川千代松

私に進化論を書けといふならば話がわかるが、金だとか貯金に就いて書けといふのは、之はカトリックの坊さんに進化論を書けと云ふのと同じ様なものである。

ところで私は始終考へてゐるが、自分位貯金の下手なものはない。夫れも自分だけでなく、父も祖父も金を貯める事は非常に下手であつて、母が能く私に話した事があるが、私の祖父の家は座敷の畳が傾斜して居て圓いものを下に置く時と轉がつたといふ事である。當時宅の裏に質屋の土蔵があつて、泥棒が常に宅の小さい庭を通り抜けてその土蔵に入つた。その都度祖父が、泥棒迄が己を見送つて、隣の家にはかり這入る、一度位は寄つて行つてもよさうなものなのに、と云はれたとの事である。

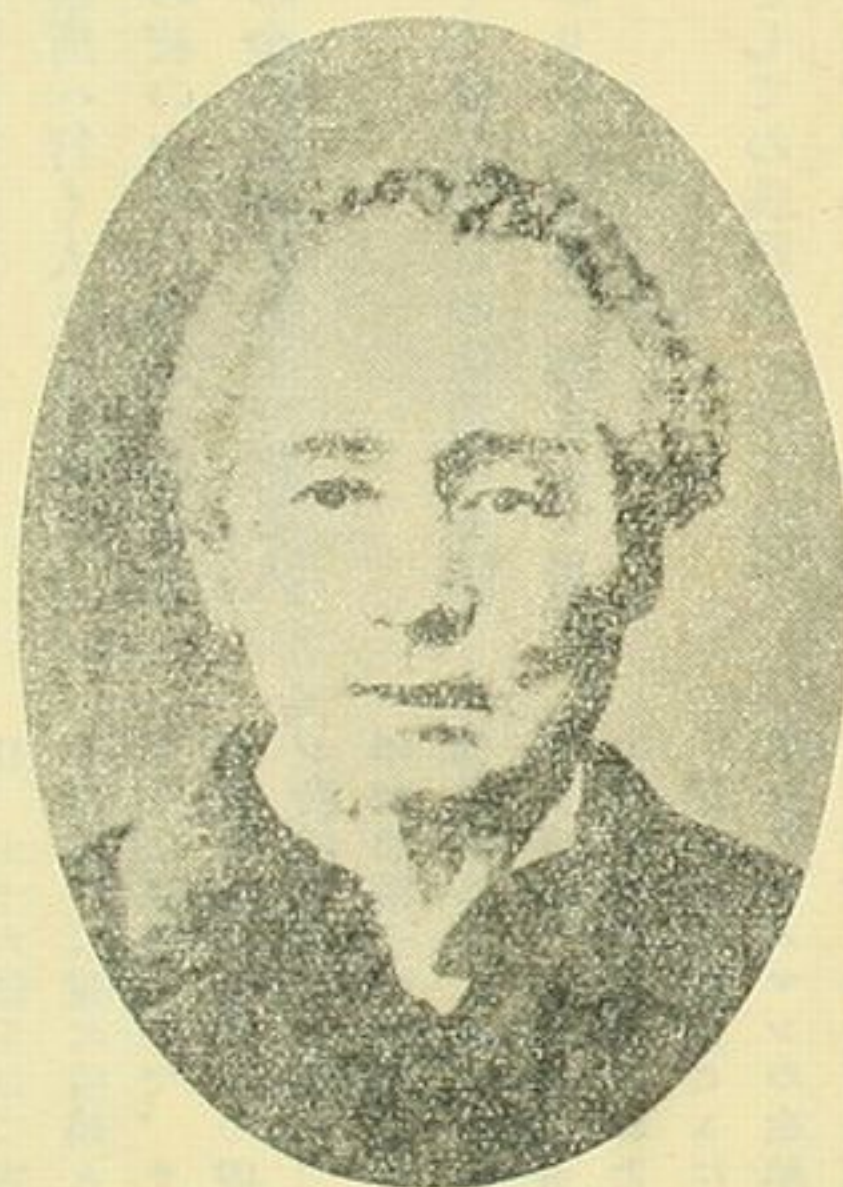
斯様であつたから、祖父は文字通り赤貧洗ふが如しと云ふ様

で貯金等は無論一文もなかつたのであるとの事であつた。夫れから父になつても同じ様で、幕府の時役目を勤めて居たが、昔風の武士で金は汚しいものであると云ふ考へが深く腦裡に滲み込んで居たものと見え一生貧乏で居た。父は昔長崎奉行の代理を勤めた事があつたが、その時父に随行して行つた親戚のものが、長崎で色々の品物を貰つて來たとて大層父に怒られたと母が私に話した事がある。又静岡藩で郡長を罷めた時に徳川公から、大金をいたゞいたが、それも東京へ來てから親戚のものに取られて仕舞つた。でも父は自分で食つて行ければ、夫れで宜しいと云ふて澄ましては居たが、その時には私も學校に居たので、私達の學費にも父が困つた事を覚えてゐる。

又金の事で父は最も親しくして居た勝舟海先生とも喧嘩をした事がある。夫れは父が今云ふた郡長を罷め、隠居して、百姓

になると云ふて駿河の駿東郡長澤村の田圃に一軒の小さい家を建て、住んで居た時、勝さんが確か參議とか云ふ御役に就かれて上京される途中父の宅に一泊せられて、色々の話をせられ、大層睦じく一夜を過ごされた事があつた。その時、自分が朝廷へ勤める様になつたから、お前にも夫れ相應の役を見付けてやると云はれ、東京へ來られてから長い手紙を送られたが、その手紙が氣に喰はぬと云ふて父は大層立腹して、死ぬまで勝さんに會はなかつたのである。

此の手紙と云ふのは之れから後は何んでも金だ、金がなければ、子供の教育も出來ない。であるから如何なる事も忍んで金を作れと云ふてをられたのである。父は夫れを諍むとすぐに破いて火に投じ、世も末になつた。勝は今迄斯んな男ではなかつたが、金さへあれば何んでも宜しいなどは實に見下げた人間であると云ひ烈火の如く怒つた。



勝舟海先生

斯様であつたから父は金を溜める杯と云ふ考を少しも持合はせてゐなかつた許りでなく、夫れ自身が一つの罪惡でもある様に思つて居た。處が世の中と云ふものは、父の斯様な氣質を利用するものがあつて、父が役を罷めた時徳川家から頂戴した金を父から奪つた親戚があつて、父が死ぬ時には夫れは本當に一文なしであつて、葬式にも困つた位であつたが、維新前には目付迄勤めたものであつたから、友人もまだ幾らか居て、當時幾通かの通知書も出したが、父の友人で宅に來て呉れた者は勝と加藤弘之の兩先生丈けであつた。

勝先生は本當に父の竹馬の友であつたから、今云ふ様ではあつたが、私には勝の處へ行つて色々教はつて來い。己は金の事で、口を利くのは嫌だが、偉い人であるから、お前は行つて教はつて來いと申されたので、私は父が生きて居た時にも又其の後も能く氷川の邸へ行つたものである。夫れで父が死んだ時にも勝伯は當時では仲々の大金を持つて來て呉れられ「おやちが生きて

勝舟海先生と私の父

理學博士 故 石川 千代 松

私に進化論を書けといふならば話がわかるが、金だとか貯金に就いて書けといふのは、之はカトリックの坊さんに進化論を書けと云ふのと同じ様なものである。

ところで私は始終考へてゐるが、自分位貯金の下手なものもあるまい。夫れも自分だけでなく、父も祖父も金を貯める事は非常に下手であつて、母が能く私に話した事があるが、私の祖父の家は座敷の畳が傾斜して居て圓いものを下に置くと轉がつたといふ事である。當時宅の裏に質屋の土蔵があつて、泥棒が常に宅の小さい庭を通り抜けてその土蔵に入った。その都度祖父が、泥棒迄が己を見送つて、隣の家にはかり這入る、一度位は寄つて行つてもよささうなものなのに、と云はれたとの事である。

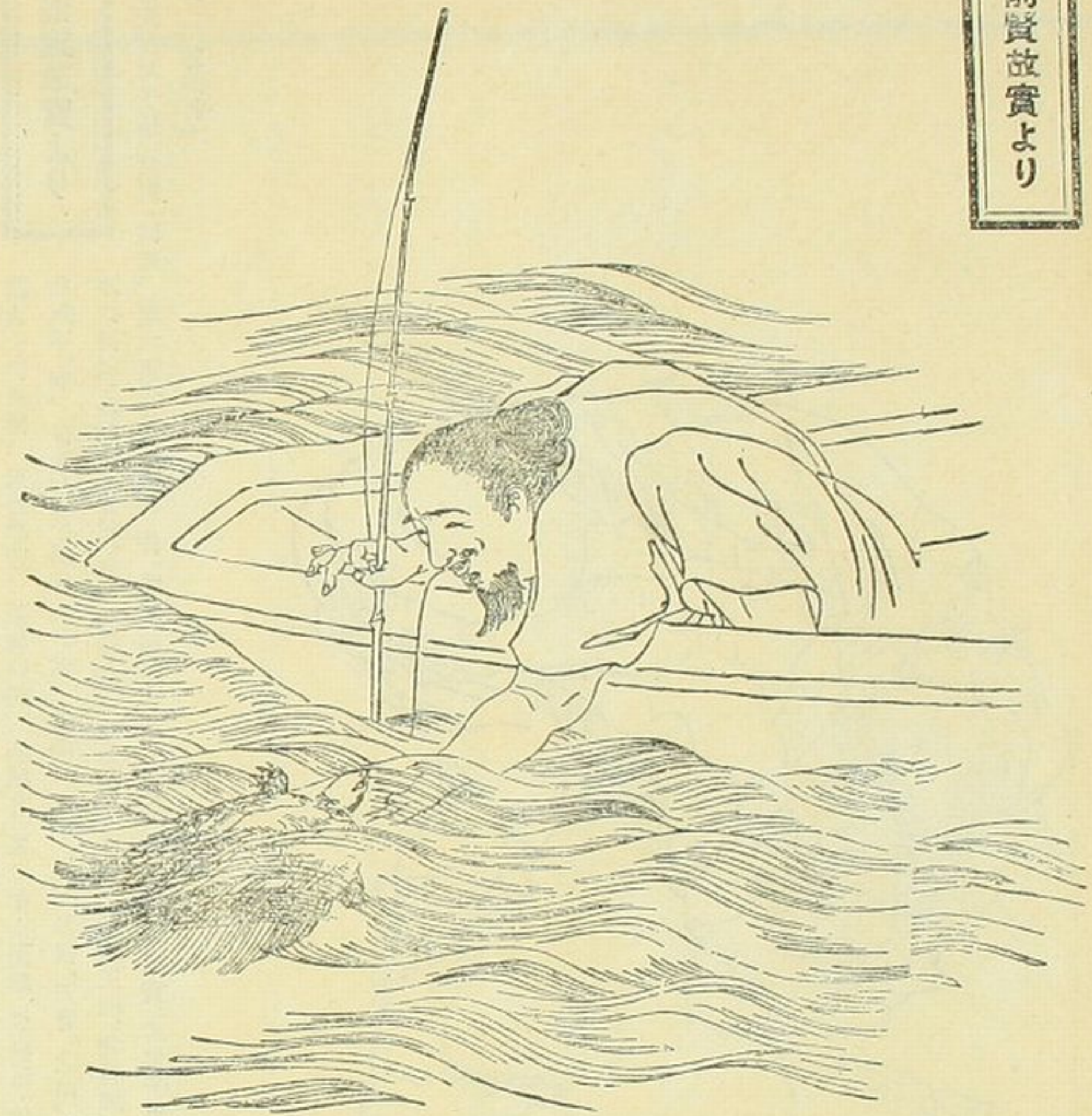
斯様であつたから、祖父は文字通り赤貧洗ふが如しと云ふ様

で貯金等は無論一文もなかつたのであるとの事であつた。夫れから父になつても同じ様で、幕府の時役目を勤めて居たが、昔風の武士で金は汚しいものであると云ふ考へが深く腦裡に込み込んで居たものと見え一生貧乏で居た。父は昔長崎奉行の代理を勤めた事があつたが、その時父に隨行して行つた親戚のものが、長崎で色々の品物を貰つて來たとて大層父に怒られたと母が私に話した事がある。又静岡藩で郡長を罷めた時に徳川公から、大金をいたゞいたが、それも東京へ來てから親戚のものに取られて仕舞つた。でも父は自分で食つて行ければ、夫れで宜しいと云ふて澄ましては居たが、その時には私も學校に居たので、私達の學費にも父が困つた事を覚えてゐる。

又金の事で父は最も親しくして居た勝舟海先生とも喧嘩をした事がある。夫れは父が今云ふた郡長を罷め、隠居して、百姓

勝舟海先生と私の父
私に進化論を書けといふならば話がわかるが、金だとか貯金に就いて書けといふのは、之はカトリックの坊さんに進化論を書けと云ふのと同じ様なものである。
ところで私は始終考へてゐるが、自分位貯金の下手なものもあるまい。夫れも自分だけでなく、父も祖父も金を貯める事は非常に下手であつて、母が能く私に話した事があるが、私の祖父の家は座敷の畳が傾斜して居て圓いものを下に置くと轉がつたといふ事である。當時宅の裏に質屋の土蔵があつて、泥棒が常に宅の小さい庭を通り抜けてその土蔵に入った。その都度祖父が、泥棒迄が己を見送つて、隣の家にはかり這入る、一度位は寄つて行つてもよささうなものなのに、と云はれたとの事である。
斯様であつたから、祖父は文字通り赤貧洗ふが如しと云ふ様
で貯金等は無論一文もなかつたのであるとの事であつた。夫れから父になつても同じ様で、幕府の時役目を勤めて居たが、昔風の武士で金は汚しいものであると云ふ考へが深く腦裡に込み込んで居たものと見え一生貧乏で居た。父は昔長崎奉行の代理を勤めた事があつたが、その時父に隨行して行つた親戚のものが、長崎で色々の品物を貰つて來たとて大層父に怒られたと母が私に話した事がある。又静岡藩で郡長を罷めた時に徳川公から、大金をいたゞいたが、それも東京へ來てから親戚のものに取られて仕舞つた。でも父は自分で食つて行ければ、夫れで宜しいと云ふて澄ましては居たが、その時には私も學校に居たので、私達の學費にも父が困つた事を覚えてゐる。
又金の事で父は最も親しくして居た勝舟海先生とも喧嘩をした事がある。夫れは父が今云ふた郡長を罷め、隠居して、百姓

前賢故實より



水江浦島子

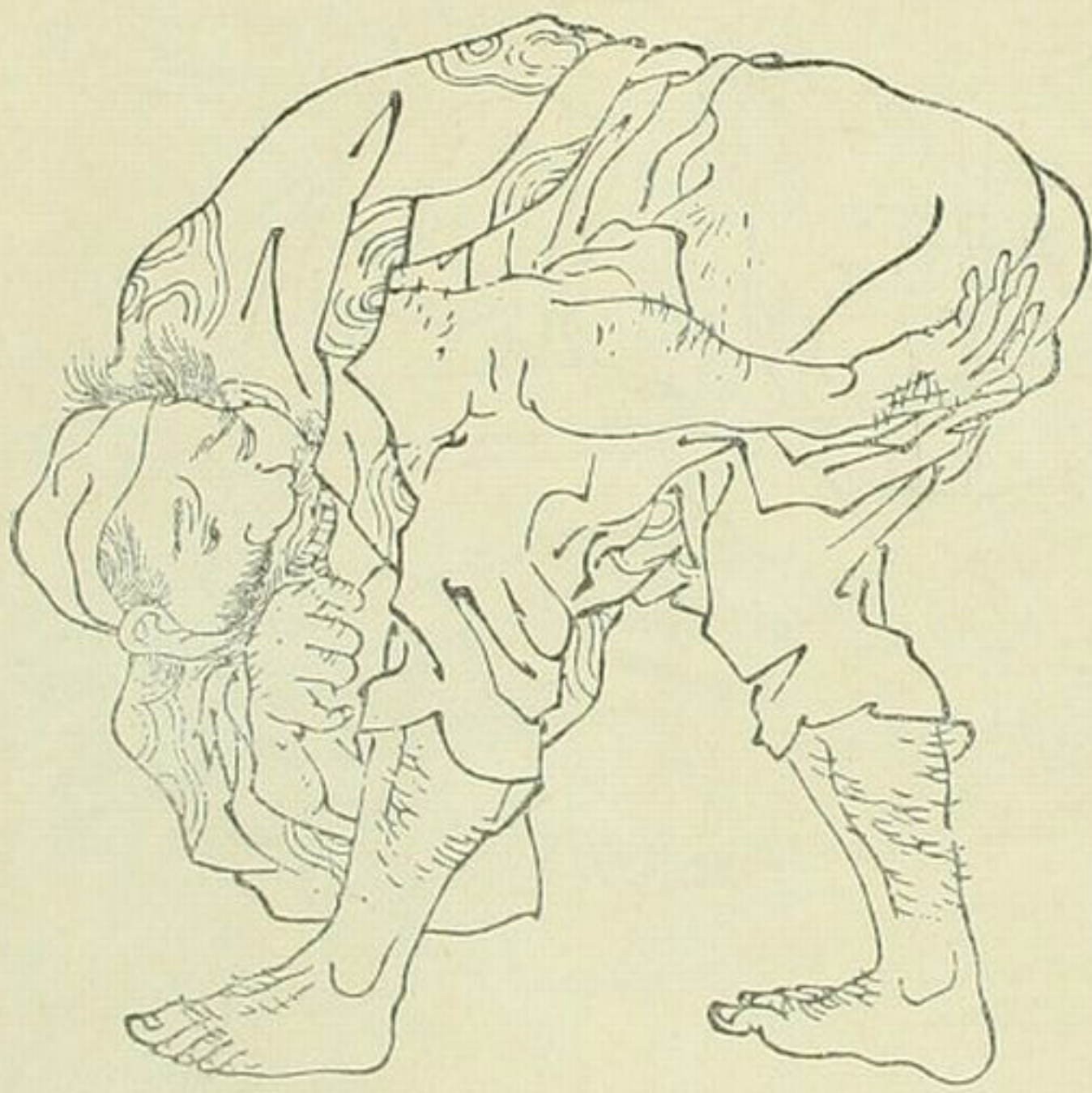
丹波餘社郡後置丹後管川人也。雄略帝廿二年七月。釣于海。得大龜。龜化為美女。浦島子悅以爲婦。遂俱入海。到蓬萊。備極仙家之樂。久之生桑梓之念。女知其情。不敢抑留。臨別以玉匣貽之。封緘甚牢。再三誡曰。若欲再相見。慎勿啓視焉。浦島子上船。俄頃至澄江浦。訪其舊里。則邑閭變遷無相識。彷徨之際。會見漁衣老嫗。因問已新故。嫗曰不知也。吾年一百七歲。古老相傳曰。往昔是地有浦島子。釣于海。一旦乘舟去。終不歸矣。浦島子惘然自失。乃試開玉匣。有紫雲起於匣中。俄而顏容衰萎。爲老翁。浦島子恍惚彌日。後鍊形頤神。棲息巖阿。不知所終。

沖、横川の二烈士

上掲伊企難の痛快な日本男子の氣魄を知るに及んで、日露戰役中胡北の露と化した沖、横川の二烈士が思ひ出される。

前賢故實より

副吉士伊企儼。天資勇烈。欽明帝朝。新羅有罪。伊企儼副男麻呂伐之。我軍不利。伊企儼爲新羅所擒。誘降百方不從。乃拔刀脅之曰。汝言日本之將。我隨。則活汝。否則殺。伊企儼大呼曰。新羅王。我隨。竟不屈而死。其子抱父屍同死。妻大葉子在虜中。作歌悲痛之。聞者皆爲垂涕。朝廷賞其父子忠孝。永免三族課役。



沖 頌介

沖頌介は明治七年六月長崎縣平戸に生れ、第五高等學校、早稻田專門學校を共に中途退學し、明治三十四年九月北京に入つて東文學社の教師となつたが、暫くにして文明學校を創立、日露の風雲急を告ぐるや、陸軍通譯として明治三十七年二月同志六人と共に軍事上の重要任務を帯び、敵の後方チチハル附近に出沒し、輸送線を絶たんとすため、雅兒河の鐵橋を破壊せんとして敵の巡邏隊に發見されて捕はれ、四月廿一日横川省三と共にハルビンに於て銃殺された。齡三十一。大正十三年二月從五位を贈らる。

横川省三

陸中和賀郡の人、舊姓三田村、幼名勇治、北漢、精軒と號す、自由黨の志士として加波山、三大、建白等の諸事件、保安條例等に連坐し後東京朝日新聞記者となり明治二十七年郡司大尉の千島探檢に同行、日清戰役、征臺役には從軍記者、米國留學等を経て日露戰役に軍事探偵となつた。齡四十、沖氏と同様從五位を贈らる。

